

## 台湾漢民族の死霊と土地

——謝土儀礼と地基主をめぐる——

植野弘子

- 一 序——死霊と土地
- 二 漢民族の超自然的な世界
- 三 「鬼」の世界
- 四 謝土と地基主
- 五 「鬼」の神と領域の神
- 六 結び——死霊と「地」

### 論文要旨

本稿は、台湾漢民族における死霊と土地の超自然的な存在との関連についての一試論である。漢民族においては、祖霊と死霊は明確に区別されている。死霊―「鬼」は、子孫をもたず、あるいはこの世に恨みを残して死んだものであり、冥界で不幸な境遇にあるとされる。こうした「鬼」はこの世にさまざまよい出で人々に不幸を振りまくことになる。しかし、「鬼」は可変的性格をもち、祖先にも神にも変化する存在である。これまでの研究においては、「鬼」は霊的世界のアウトサイダーであり、「鬼」を無体系なものともみなしてきた。しかし、「鬼」はけっして混沌たる世界を漂漾しているのではない。人と「鬼」との交信には「鬼」を統轄する神々が登場する。この神々は陰陽両界に関わるとともに「地」に関わる神であり、「鬼」が昇化して神になっ

たものもいる。落成儀礼（謝土）において、人は建造物を建てた土地から邪悪なものを払い、その土地を「陰」の世界の土地の持ち主（地基主）から買い取らねばならない。（地基主）とは、かつての土地の持ち主で死後その霊がその土地に残ったものとされている。つまり「鬼」であり、「鬼」が土地の主となるのである。土地は「陰」から「陽」の世界のものとなって初めて人が住むのにふさわしいものとなる。土地は陰陽の両界をつなぐ場である。人と死霊は「地」に関わる超自然的な存在によって媒介され、人はその住む地によって冥界と切り放せない現世を知るのである。漢民族は冥界をこの世と同様にリアルに描いている。そして、冥界と地とを結び付けることによって、また「鬼」という浮遊性をもつ超自然的な存在に一定の秩序を与えることによって、人が他界を生活の中に感じ、また解釈を与えているのである。

## 一 序——死霊と土地

土地は人の住む場であるだけではない。台湾漢民族においては、土地は死霊と人間との接点といえる。人の住む土地は、死霊から譲られてこそ人が住むにふさわしい場となる。家屋や廟の大規模な落成儀礼には、 $\Delta$ 地契碑 $\nabla$ が作られる。これは、陰陽両世界にわたる土地の契約書である。 $\Delta$ 陽間 $\nabla$ に住む人間は $\Delta$ 陰間 $\nabla$ の土地の所有者 $\Delta$ 地基主 $\nabla$ から土地を買わねばならない。 $\Delta$ 地基主 $\nabla$ とは過去にその土地を所有していた者で、祖先ではない死者であるという。これは祖先になりえぬ死霊である。漢民族では、祖先になりえぬ死霊——「鬼」は、人に不幸をもたらす恐るべき存在と考えられており、「鬼」に対する祭祀は手厚く行われる。この「鬼」の統轄者は $\Delta$ 土地公 $\nabla$ であるという。 $\Delta$ 土地公 $\nabla$ は、台湾において最も信仰の厚い神の一つであり、土地の守護者であるだけではなく、商売の神としても信仰を集めている。こうした現世利益をもたらす神はまた死霊の統轄者でもある。人が生活している「地」は「鬼」とのかかわりを内在させて存在している。

「鬼」は漢民族の靈魂観、他界観、さらに神觀念の解釈には重要なキーワードである。これまでも「鬼」に関しては多くの人類学的研究が行われており、特に「鬼」の存在を動的に捉えようとする諸研究が成果を納めている<sup>(3)</sup>。そこでは、「鬼」は祖先にも神にも転化が可能であり、冥界にもこの世にも存在し、両義的・可変的であるという指摘がなされ

ている。しかし、「鬼」と「地」をめぐる超自然的存在との関連についてはほとんど注目されることがなかった。本稿は、特に「鬼」の性格とその意味を、「地」の霊的意味との関連から考察を加えるものである<sup>(4)</sup>。

「鬼」と「地」の関連に注目することによって、死霊と人とのかかわりを追究し、他界と現世の連続がいかに表現されているかを明らかにするための一考察を提示したい。この問題に関してはこれまでほとんど系統だった研究が行われていないので、本稿では台湾の調査資料を中心として分析を行う。このため、本稿は台湾漢民族、特に台南地域の事例に基づき一試論であることをわけておきたい。

本稿の資料は、筆者が調査を行った台南縣A郷の一村——佳榕林<sup>(5)</sup>とその周辺地域のものである。この地域は鄭成功時代に福建系漢人の移住が始まり、原住民を他地域に追いやりたり、あるいは完全に同化してきた。現在では、福建系漢人と自認する人々のみが居住している。その多くは漳州出身者の子孫であるが、少数派である泉州出身者との間には言語や慣習の差異は現在では殆ど認識されていない。

### 一一 漢民族の超自然的世界

死霊——「鬼」について述べる前に、まず「鬼」の性格を位置づける背景となる世界観、さらに「鬼」とは性格を異にする死者——祖先について概観する。

## (一) 台湾漢民族の世界観

これまでの漢民族の世界観の研究では、宇宙を垂直方向において三区に分する事が共通の理解であった。その三区分された世界とは、「天廷」「世間(人の世界)」「地府」あるいは「天廷」「陽間(この世)」「陰間(あの世)」などといわれる。この三区分は一般の人々にも受け入れられ、研究者もこの区分に従って超自然的世界をとらえてきた。しかし、ここには「天地」という方向上の区分と、「陰陽」という生死による区分が混同されている。陰間は「地下」として、陽間は「地上」として一般に認識されている。つまり地とは人の住む世界でもあり、死者の世界でもある。この「地」の世界と「死」の世界の連結は、人が常に死と隣合わせにいる存在である事をも物語っている。

超自然的存在として「神」・「祖先」・「鬼」の三種のカテゴリがあるが、これは現実の世界を反映したものである。神は帝国の官吏を、祖先は家族とリニージを、「鬼」は異邦人・外部者を表すもの(WOLF 1974 [15])といわれるように、超自然的世界は現実の世界と同じ論理の中で語られる。神・祖先・「鬼」と天廷・陽間・陰間の三区分は対応するものではない。神は天廷のみならず三界に存在し、三界に関して職務を持つのである。祖先と「鬼」は共に主として陰間にあるが、ときには人の住む陽間にも存在する。この三界は全て閉鎖的なものではない。

「神」は人々に益を与える存在であり、最高神玉皇上帝(天公)を頂点とするパンテオンの一員である。

「祖先」と「鬼」はともに死者であるが、両者の間には明確な区別がつけられている。あるべき死に方―正常死をして子孫に祭祀されているのが「祖先」であり、異常死をしたり子孫に祭られない死霊は「鬼」になる。この両者は冥界への参入の正統性と子孫による祭祀の有無によって区別される。しかし、この世での霊に対する祭祀のあり方によって両者は相互に転換可能なものである。また、祖先と「鬼」の区別は、これらに対する人々の性格によっても異なる。子孫が祖先として祭っている霊であっても、子孫以外の人にとっては「鬼」となることもある。この場合の「鬼」は、人と死霊との関係性に基づいて、その性格が検討されなければならない。

また、「鬼」については神との関係においても検討する必要がある。「鬼」は「神」にも変化するが、こうした神あるいは神的な超自然的存在は、人と冥界の交流にかかわる事が多く、また土地と関連している事がしばしばである。

「鬼」は祖先や神になり、陰間・陽間のいずれにも存在しうるというように、可変的性格を強く持つており、その不安定性が人々の不安をかき立てるものとなる。「鬼」の存在する世界は主として陰間であり、また陽間にも存在しうる。また神の世界においても、地の神の多くは「死」にかかわる神である。漢民族の死の世界や死霊の問題を考察するには、人と地のかかわりに注目せざるを得ない。

(一) 死者と冥界

「子孫がいる死者が祖先となる」というこの単純な定式も、人々の認識の中では現実味を持ったものとなっている。漢民族は、冥界にも現世と同様な世界を想定している。冥界において、死者が「生活していく」ためにはこの世と同じように食物や金銭が必要である。このため、葬式の際には、死者のものとして冥界の家<sup>(9)</sup>紙厝<sup>(9)</sup>や冥界の金銭<sup>(10)</sup>銀紙<sup>(10)</sup>、さらに衣類が焼かれ、冥界へ送られる。その後、生者は死者に対して、継続的に冥界の金品を贈らなくてはならない。子孫からこうした給付のある死者は「祖先」として冥界で安楽な生活ができるのである。しかし、子孫から給付を受けられない死霊は、冥界において飢えてさまよう「鬼」となり、生活の糧を求めてこの世を徘徊し、自らの苦境を訴えるためにこの世の者に災いをもたらす存在となる。そこで、この世の人々は「鬼」に対して供物をあげ、災いを避けようとして「鬼」の祭祀が行われる。

また、子孫があっても、現世に恨みを残して死んだ者は「鬼」となりえるのである。台湾においては、人は年をとり、子孫を得て、その子孫に看取られながら自家の<sup>(11)</sup>厝<sup>(11)</sup>(祭祀のための部屋)において死亡すべくとざされている。このため、病人が死にそうになると、それまでいた寝室から<sup>(12)</sup>厝<sup>(12)</sup>に移す。病院にいる瀕死の者は家に連れ帰られ、<sup>(13)</sup>厝<sup>(13)</sup>で死を迎える。こうして迎える死以外はまともな死として扱われず、葬式も正式に行われぬ。もし、葬式が行われなければ、冥界の住居も金品

も死者には与えられないことになり、冥界への正式な参入方法にはならない。こうした死者は、死亡したときから正当な死者ではなく、「鬼」となりうるのである。このため、事故死、戦死、水死、自殺、行き倒れ、あるいは病院などでの病死は、異常死となる。<sup>(14)</sup>厝<sup>(14)</sup>で死亡しない者の霊は「鬼」になりうるのである。また、子供、未婚の者は<sup>(15)</sup>厝<sup>(15)</sup>では死亡できず、これらも正当な死者ではない。

しかし、祖先も「鬼」も可変的なものである。祖先も祭祀する子孫がいなくなれば「鬼」になる。子孫がない「鬼」は子孫を得る—たとえば死後養子や冥婚<sup>(16)</sup>によって祖先となり、冥界での正当な地位を得ることができ。また、「鬼」は神的存在として祭祀されることによって、生者に害を及ぼす性格を変え、人々に福をもたらす存在として信仰を集めることもある。

冥界への正式な参入と冥界の生活を保証してくれる子孫の存在の両者が揃う時、死者の霊は「祖先」となり、子孫にも他の者にも危害を加えることは原則としてない。しかし、条件を満たさない霊は「鬼」となり、人々に不幸をもたらす存在として認識されるのである。

(二) 祖先祭祀

祖先の祭祀対象は、墓と位牌の二つになるが、これには漢民族の霊魂観が反映している。

人の霊には、「魂」と「魄」があることは一般に認識されているが、その内容については解釈に差異がでてくる。古来より、「魂」は人の生

命を司る陽の生氣であり、死後天に昇り、身体を離れて永遠に存在するとされた。対して「魄」は人の肉体を司る陰の生氣であり、死後地上に留まり土になるという。「魂」は「陽府」・「陽宅」といわれる家屋や宗族の祭祀場「宗祠」において位牌として祭祀されることになり、「魄」は「陰府」・「陰宅」といわれる墳墓において祭祀されることになる。<sup>(13)</sup>

また、「三魂七魄」という語が人の霊について語られる時にしばしば聞かれる。しかし一般の者は、言葉は知っていてもその内容については説明することは出来ない。有識者も、魂と魄の両者によって人の霊が構成されることは認識していても、その内容の細部にわたって説明できる者はいない。三魂とは三種の魂であるが、それぞれ墓、位牌、△地府▽（冥界）にいと解釈する者もいる。それによれば、墓、位牌で祭られている死者でも、△地府▽の魂が苦しんだり、この世にさまよいでていることがある。こうした状態はこの世の者に不幸をもたらすことになり、こうした魂を安撫するための儀礼が必要になってくる。七魄については、一般の人々はほとんど内容を述べることはできない。<sup>(14)</sup>

いずれの解釈においても、人の霊は多層的構造を有するものとされ、多様に解釈され、多様な祭祀が必要なものとしてされている。しかし、墓と位牌の祭祀は祖先の霊に対しては必ず行われるべきものであることは、共通理解となっている。

佳榕林一带では、墳墓祭祀は大して重視されていない。死後三年間は清明節に必ず墓参が行われる。その後は嫁を迎えた時や男子が生まれたときに死んだ親に報告するためとして墓参が行われるのみであり、これ

以外は墓参を行わなくてもよい。墓での祭祀は忘却されていくものであるが、これは墓に魄があり、それはいずれ消滅するという解釈に立つならば、当然の帰結である。

位牌は、△神主牌▽△公媽牌▽△木主▽などと呼ばれている。位牌には死者の名前、生年月日、死亡年月日、「孝男」（息子）の名が記されている。位牌は家屋内では△厅▽に置かれ、毎朝夕線香が上げられる。位牌は△厝架▽と呼ばれる棚状の祭壇や△佛厨▽と呼ばれる簞笥大の厨子に納められている。△厅▽の正面の壁には神々の絵があり、位牌は右側（向かって左側）に置かれる。漢民族においては左が優位であり、位牌は神より劣位の位置―右に置かれる。△佛厨▽も内部正面には神画があり、位牌は右側に置かれる。位牌は、命日、大晦日、元旦、清明節、端午節、中元節、冬至節に祭祀が行われ、供物が上げられる。△厅▽での位牌祭祀は家人の手によって行われ、宗教的職能者を招くことは命日に特別の儀礼を行う場合を除いてはない。

位牌祭祀は墳墓祭祀にくらべて世代を経過しても継続され、かつ重視される。死者が祖先となるには、位牌をもち、その位牌を祭祀する△孝男▽を得ることが必要である。位牌祭祀が行われることによって、冥界での安楽な生活が得られ、祖先としての位置が確保されるのである。

## 二二 「鬼」の世界

以下においては、「鬼」はいかに認識され、いかに祭祀されているか、

表1 祖先と〈好兄弟〉の祭祀

	祭祀日	祭祀時間	祭祀場所	紙銭	供物内容	付随祭祀対象
祖先	節日 命日	午前 正午	屋内	銀紙	質素	<庁>の神 (鬼月以外)
好兄弟	節日 前日	午後	屋外	銀紙 経衣	豪華	土地公 (媒介者)

さらに「鬼」の世界の秩序について述べることにする。

(一) 鬼とその祭祀

① 好兄弟

△好兄弟△とは、「鬼」に対する尊称であり、「鬼」という不吉な語を避けて、話す場合には△好兄弟△と称する。これは△孤魂△ともいわれ、

冥界での生活を支えてくれる子孫のいない「鬼」であり、食物などを求めてこの世をさまよう「餓鬼」である。△好兄弟△が「鬼」の代表といえよう。△好兄弟△に対する祭祀は農曆七月に△鬼月△の祭祀として行われるものを中心とし、祖先祭祀や神祭祀にも付随して行われる。

ここでは、各家で行われる位牌祭祀―△拝祖△と鬼(△好兄弟△)祭祀―△拝門口△を対比させながら、「鬼」の性格を述べることとする。(表1)

まず、時間については△拝門口△は、必ず祖先祭祀に先だって行われる。大晦日、清明節前日、端午節前日、中元節前日、冬至節前日に行われる。これはまず△好兄弟△にご馳走をして翌日の祖先への供物を奪わないよう

にするためである。△拝門口△は午後に行われ、△拝祖△が午前や正午に行われるのとは異なっている。

場所は△拝祖△は位牌のある△庁△で行われるが、△拝門口△は屋外であり、庭に机が出され供物が並べられる。

儀礼内容では、△拝祖△の前には、庁に祭祀されている神の祭祀△拝佛△が行われる。庁の位牌祭祀では、まず神に対して果物などの簡素な供物を供え、線香を上げ、紙銭(△金紙△)が焼かれる。その後位牌に供物を上げる。供物は煮た△三牲△(豚肉・鶏一羽・魚一匹など三種類の牲醴)、米、果物、酒に加えて、人間が食べるのと同様の料理が捧げられる。家人の年長者などが線香を上げ、祖先に供物を捧げることが告げる。その後、△銀紙△が焼かれ儀礼は終了する。△拝門口△では、△庁△の神に対する祭祀は行わないが、唱え言には△好兄弟△が△土地公△の統轄のもとで供物を受け取ることが述べられる。また、最後に△銀紙△を焼いて△好兄弟△に贈る際に、△土地公△に対して△金紙△が焼かれる。これは△好兄弟△を統轄するのが△土地公△とされるためであり、祖先祭祀には△土地公△は関与しない。

△拝門口△の供物は、祖先に対するのと同様の△三牲△などの食物であるが、祖先に対するよりも豪華である。これについては、「祖先は内の人だから簡単でよいが、△好兄弟△はお客だから」といった説明がなされる。「鬼」である△好兄弟△の供物が不足することは、「鬼」によって災いをもたらされることになり、人々はこうした事態をさけるために供物を惜しまない。また、紙銭は祖先に捧げる△銀紙△以外に、△経衣△

と呼ばれる紙銭が燃やされる。これは黄土色の短冊状の紙に衣服や身の回りのものが印刷されたものであり、これらの品々を△好兄弟▽に捧げることを意味する。△経衣▽は△好兄弟▽に対してのみ見られるものである。祖先はこうした品々は葬式の際に既に受け取っていると考えられている。

② 亡 魂

△亡魂▽については、これを△好兄弟▽と全く同様とする認識もあるが、特に実際に特定の人に災いを及ぼしている存在に対してこの用語が用いられることが多い。<sup>18</sup> 病気になった時には「どこかの亡魂のせい」であると考えられる。△亡魂▽には「無嗣之亡魂」「有嗣之亡魂」があると いわれるように、子孫の有無は関係しない。△亡魂▽によって不幸が起きているのではないかという疑いがあれば、宗教的職能者によって△亡魂▽が災いの原因であるのか、もしそうであればどのような△亡魂▽であるかを見極め、供養をして霊を慰める。この供養の内容は千差万別であり、単に紙銭を焼くものから△亡魂▽に位牌をつくる、あるいは供養塔を立てる、さらには祠を建てて△亡魂▽を神的存在として祭祀するものまである。

△外方▽<sup>19</sup>と言われるものも△亡魂▽であり、これは自分の祖先でないものであり、外にあって人にとりつくものとされる。このように、もし死霊に子孫がいたとしても、その祭祀が充分でなかったり、この世に恨みのある者は人に障りをもたらすのである。

また、△水鬼▽といわれる溺死者の霊は、死亡した場において代わり

の者を引き込まない限りは自分は浮かばれないため、人を水中に引き込もうとする。これも人々に恐れられている「鬼」の一つである。

以上のような死霊は、たとえ子孫が存在していても災いをもたらす存在であり、人が恐怖を持ち、この世の不幸の説明にしばしば用いられる霊的存在である。

また、子孫がない「鬼」のうち、人に災いをもたらすものとしては、未婚女性の霊△孤娘▽△女鬼▽△女霊▽がまずあげられよう。漢民族においては、死亡女性は生家で祖先として祭祀されることは許されず、こうした霊は家人などに災いをふりかける存在として認識されている。<sup>20</sup>

△亡魂▽への解釈は人々の間においても実に多様であるが、死者の霊は現世に災いを振りかける可能性をもつが、その供養によって現世の安泰がもたらされる。死霊の性格は可変的であると同時に、死霊がこの世の幸不幸を転換させる力を有するのである。

(一) 「鬼」の統轄者

鬼はこの世に災いをもたらす不吉な存在であるが、けっして無秩序状態に在るわけではない。人と死霊をつなぐ秩序体系は形成されている。

前項で述べたように、△好兄弟▽は△土地公▽の管轄下にある。地を支配する神が死霊と人との媒介者となっている。

農曆七月「鬼月」には「鬼」がこの世にくるとされるが、その時には△土地公▽とは異なる統轄者が現れる。「鬼」には、この世を徘徊しているもの、冥界に在るものがあるが、鬼月には冥界に在るものもこの

世に出て、自由に徘徊し人々の嚮応を受けることができる。この一か月はこの世には「鬼」が溢れ、超自然的世界の秩序が転換しているのである。通常は、超自然的世界では玉皇上帝が最高位にあるが、鬼月には「中元公」が最高神となる。「中元公」とは三官大帝の一神、地官大帝であり、七月一五日を誕生日としている。三官大帝は玉皇上帝に次ぐ神々であるが、このうち「地」に関する神が死霊の月の最高神となるのである。鬼月に行われる「鬼」に対する祭祀は、しばしば「拜中元公」といわれ、鬼月の支配者「中元公」への祭祀と同一視されている。鬼月には、神の祭祀は原則的には行われず、祭祀は「鬼」に対するのみになる。

鬼月には、各地で「普渡」が行われる。これは村落や廟の祭祀集団を単位とした共同的な「鬼」祭祀であり、「鬼」の祭壇を仮設して行う。人々は各自供物を持ち寄り、その豪華さを競い合う。普渡の対象となる「鬼」がいかなるものであるかについて、人々に説明を求めると、「子孫のいない霊」「さまざまの霊」という答が返ってくる。いかなれば、「好兄弟」「亡魂」であり、特に人々が日頃から恐れている霊である。また普渡において、「大士爺」あるいは「普渡公」などと呼ばれる神が祭られるが、これは「鬼」の統率者である。道士の説明によれば、これは観世音の化身であるという。観世音は本来、男女のいずれであるかは明確ではないが、普渡の際には男として「大士爺」になる。紙製の像で「大士爺」が作られ、頭に観世音を戴き、恐ろしげな顔をし、手に剣を持った姿となる。「大士爺」は供物の方を向いて置かれ、「鬼」が勝手気ままに供物をむさぼって混乱をおこさないように、また人々に

危害を加えないように監視するのである。普通の「鬼」には像が作られることはないが、「大士爺」は神として有形性があり、紙銭も「金紙」が上げられる。鬼月は「鬼」がこの世を徘徊する異常な月ではあるが、けっして無秩序な状態にあるのではない。「普渡」においては「大士爺」に統轄され、さらに鬼月の最高神「中元公」の支配下にある。

このように「鬼」は「地」の神をその統率者と戴き、その荒ぶる魂を統御されている。さらに人は、地の神を媒介として「鬼」との交信が可能となるのである。

#### 四 謝土と地基主

台湾において、人が土地に家屋、廟、墓を建てて利用するには、儀礼が必要である。土地は初めから人に与えられているというのではなく、土地の超自然的存在と人との契約によって土地は建造物を建てることが可能になる。つまり、土地にいる邪悪な存在を追い払い、土地の守護者を祭り、「地基主」から土地を買い取るによって土地は人のものとなり、その土地を利用する人々およびその子孫の繁栄が保証されるのである。台湾ではこのための儀礼を「謝土」と呼んでいる。「地基主」は、土地の以前の持ち主であり祖先ではない死者であり、その霊は土地に宿っている。「鬼」は恨みを残した土地にとどまると考えられている。「地基主」は「鬼」のものではない。しかし、玉皇上帝に任じられるような正式の「神」ではない。「地基主」はまさに死霊と神との両義的



性格をもつ「地」の超自然的存在である。

## (一) 謝土儀礼

△謝土▽とは、家屋、廟、墓を建造した際に行われる儀礼であり、その原義は、土地の超自然的存在に対して、工事の無事終了を感謝することである。しかし、儀礼の主たる目的は、建造物の占める土地を人のものとし、邪悪なるものを追い払い、浄化した空間を維持することにある。台湾における△謝土▽の実施やその内容については、経済的問題や地域性があり、一概に論ずることはできない。

佳榕林一帯では家屋を建造した際には、金銭的余裕があれば△謝土▽は落成時に行われる。もし行わなければ、家内に不幸が続いた場合に厄払いとして行われたり、結婚式などに併せて実施されることもある。

墓の△謝土▽は埋葬時に埋葬儀礼に付随して簡単に行われている。

廟の落成に際しては、一般に△開廟▽と呼ばれている儀礼が行われる。これは儀礼的に廟門を開き、神像を安置し、廟内を浄化することを目的としている。開廟儀礼の後、必ず△謝土▽が行われる。△謝土▽儀礼には、△普通的謝土▽と呼ばれる簡単な儀礼と、正式で複雑な儀礼を伴う△大謝土▽があるが、廟の場合は△大謝土▽である。

△謝土▽儀礼は本来、呪術師△法師▽が行うものであるが、道教の祭司―道士によって行われることもある。<sup>24)</sup>以下、△法師▽によって主宰された謝土儀礼を取り上げ、人がいかに△地基主▽から土地を得るか、△地基主▽の性格はいかなるものであるかを検討したい。儀礼内容につ

いては、△法師▽から説明を受けた。一般の人々は謝土儀礼の知識は持ち合わせていない。人々が了解しているのは、△地基主▽とは土地の以前の所有者であり、△謝土▽によって土地は人のものとなり、以後は△地基主▽を祭る必要がなくなるのみである。

事例として上げるのは、佳榕林の村廟―姑媽宮の再建の際に行われた謝土儀礼である。姑媽宮の歴史は古く、一五七九年に創建されたと伝えられる。祭神は郵仙姑媽（大媽）、何仙姑媽（二媽）、李仙姑媽（三媽）、紀仙姑媽（四媽）の四女神を中心として、他に山西夫子（関羽）、三太子（中壇元帥）、福德正神、註生娘娘などである。この廟はもと近隣一三ヶ村が共同祭祀する廟であったが、次第に村々が独自に廟をもったり、廃村になる村があったりしたため、再建完成時には佳榕林一村で祭祀するようになった。このため、佳榕林の村落規模から見れば、格式のある大きな村廟が建てられることとなった。姑媽宮は日本統治時代に廟の建物自体が廃墟と化し、神体は他の場所に移されていた。一九七八年に廟の再建が決定され、以前廟が建てられていた付近に再建場所が決められた。その後五年の歳月をかけて、一九八三年に一応の完成をみ、開廟儀礼とそれに付随する謝土儀礼が行われたのである。

### ① 開廟儀礼

開廟の時期は、廟の向きを考えて、良い時を選んで行われる。姑媽宮の完成が近づいた一九八三年は亥年であった。姑媽宮は南向きであるので亥年の開廟はよいが、翌年の子年は好ましくない。このため、まだ未完成であったが、開廟儀礼を行うこととした。開廟の日時は姑媽宮の神

表2 開廟・謝土・賞兵儀礼

日	時 間	儀 礼 名	儀 礼 内 容
10	6:50- 7:50	封廟門	廟門を閉め、封印をする
	8:00		台南市に向け、出発
	8:35-10:45	玉皇宮進香	台南市玉皇宮へ参拝
	11:10-11:30	拝大廟	大廟に参拝し、祭神代天巡狩を招く
	11:40-12:10	隣村遶境	隣村を一行が歩く
	12:20-12:50	佳榕林遶境	佳榕林を一行が歩く
	15:00-16:50	祭星	十二元辰星を祭る
	21:05-23:00	過火	火渡り
	23:35-23:45	開廟門	廟門を開く
23:50	開金炉	金炉を開く	
11	0:05		童乩のトランス状態がとける
	0:15- 0:50	安座	安座の祈禱を法師が行う
	12:45-14:00	(宴会)	廟の披露のための宴会が行われる
	14:40-15:10	(準備)	供物の配置、祭壇の準備
	15:15-15:37	降壇	儀礼開始のための祈禱
	15:42-15:46	庄外煞	<外煞>除去のための祈禱
	15:47-16:00	拝好兄弟	<好兄弟>を祭る
	16:05-16:10	拝地基主	<地基主>を祭る
	16:25-16:30	浄水	供物を清める
	16:30-16:35	疏文	祈禱文を読む
	16:45-17:05	七献	供物を置く
	17:05-17:30	擲筭・焼金	祭祀の成功の確認・紙銭を焼く
	17:30-17:40	庄煞	神煞を押さえ込む
	18:10-18:35	點鶏血	鶏の血で廟内、供物を清める
	18:35-18:50	翻神土	地中にいる邪悪なものを掃き出す
	19:05-20:00	収内煞	<内煞>を甕の中に入れる
	20:15-20:35	埋甕	村外に甕を埋める
	20:35-20:55	開光点眼	龍に開光点眼をする
	20:55-21:05	貼剪刀鏡尺符	剪刀鏡尺符を貼る
	21:05	掛桃柳枝	八卦を守る竹を掛ける
21:10	掛八卦	八卦を掛ける	
21:15	(買断土地)	<地契磚>を納めて、紙銭を焼く	
21:25-21:35	打竹符	竹符を打つ	
22:34-23:15	煮油	煮油によって廟の内外を清める	
23:15- 2:25	煮油	煮油によって村中を清める	
12	15:30	(準備)	賞兵の準備
	16:15-17:30	賞兵	五營兵を労う

の神託によって十一月一日(農曆一〇月七日)の子の刻と決められた。  
 開廟に先立ち、村人を清めるための菜食が行われる。まず、一月八日より、村廟再建の中心となった再建委員や村廟の神のシャーマンである△童乩▽は三日間肉食を避ける。それ以外の村民は十一月九日より三日間の菜食を行う。また、菜食と同時に男女の同衾も禁じられる。

開廟儀礼は△法師▽と童乩、さらに△轎仔▽を中心として進められる。ここで儀礼の執行者となる存在を簡単に説明しておこう。△法師▽は呪術師として、廟の神の祭祀、開運祈願、厄払い、死者の口寄せを行う。△童乩▽は、トランス状態に陥り、神の霊を乗り移らせて神託を告げたり、自らの霊を他界に送ったりするシャーマンである。<sup>(25)</sup> △童乩▽がトランス状態に入る際には、多くは△法師▽が共に儀礼を行い、△童乩▽の

発する言葉を解釈する。△法師▽と△童丑▽は緊密な関係にあり、神・△法師▽・△童丑▽の三者の力にバランスがとれていることが必要である。△轎仔▽は木製の小型の腰掛け椅子である。これを二人の男性が持ち神を△轎仔▽に降臨させる。神が△轎仔▽を動かし、さらに字を書き、その意思を伝えると考えられている。△轎仔▽を持つ二人の男性自身に神が降臨するわけではないが、一種のトランス状態に入っている。△轎仔▽を持つことは誰もができるものではなく、持つ二人の相性もあるとされる。△轎仔▽の動きと字についても△法師▽が解釈することが多い。姑媽宮では、三媽、四媽のみが△童丑▽をもち、他の神は△轎仔▽によって意思を伝えている。また、開廟儀礼に参加した△法師▽は佳榕林の近隣に住み、佳榕林の儀礼をいつも行っている二人の△法師▽である。以下、一月一〇日から始まる開廟儀礼について順を追って概要を述べる。(表2参照)

**封廟門**—廟の完成以前にも、神像は廟内に置かれ祭祀されている。この日、神々が台南市の玉皇宮に参拝するため、神像を廟外に出し、廟門を閉じて封印する。

**台南市玉皇宮進香**—玉皇宮は玉皇上帝を祭祀している。姑媽宮の主神二媽が玉皇上帝の義女に当たるため、義父玉皇上帝に開廟の報告のため参拝—進香を行った。進香には、姑媽宮の神々の神像を御輿に乗せ、再建委員、△法師▽、△童丑▽、△宋江陣▽<sup>(26)</sup>、村民有志が従った。玉皇宮では、姑媽宮の神々の神像が祭壇に置かれ、玉皇上帝に供物が上げられる。ここで、△法師▽が村を守るために玉皇上帝の兵士—天兵を佳榕林

に招く「調天兵」を行う。参拝後、神像を御輿に戻し帰途に付く。

**請代天巡狩**—台南市から帰途、A郷の△大廟▽<sup>(トビヤウ)</sup>に参拝する。△大廟▽は近隣七八ヶ村によって構成される祭祀圏の中心となる廟である。その祭神—代天巡狩を姑媽宮の開廟を見守ってもらうために村に招く。村で大規模な祭祀が行われる際にはしばしばこうしたことが行われる。

**遠境**—以前に姑媽宮を祭祀していた隣村と佳榕林を一行が巡り歩く。この間、△童丑▽はトランス状態に入っている。各家では道路脇に果物などの供物を出し、線香を上げる。村内を廻り終わった一行は、姑媽宮に戻り御輿を廟の前に置く。△童丑▽のトランス状態が解ける。その後、一行は一旦解散となる。

**祭星**—△法師▽が△十二元辰星▽を祭る儀礼が廟の前で行われる。この星々は人に加護を与えたり、人を害したりするものであるとされる。この晩、△過火▽<sup>(火渡り)</sup>を行うため、悪い星が人に祟らぬように先に祭るものである。

**過火**—廟に入る神を清めるため、火渡りを行う。廟の前で△法師▽、△童丑▽、△轎仔▽のほか神像を抱いた男性が△過火▽を行った。

この間、△宋江陣▽の太鼓や鉦が打ちならされ、廟の周りに集まった人々は危険な△過火▽を見、既に興奮の渦の中に巻き込まれている。

**開廟門**—△法師▽が廟門の前に立ち、△做法▽<sup>(術を施す)</sup>の後、三媽の△童丑▽が中央の廟門の前で前方回転をして廟門を足で蹴って開け廟内に入る。廟内に仕掛けられた爆竹が次々に炸裂し、騒然たる雰囲気<sup>(27)</sup>に包み込まれる。四媽の△童丑▽が脇の門を蹴って開ける。△童丑▽に

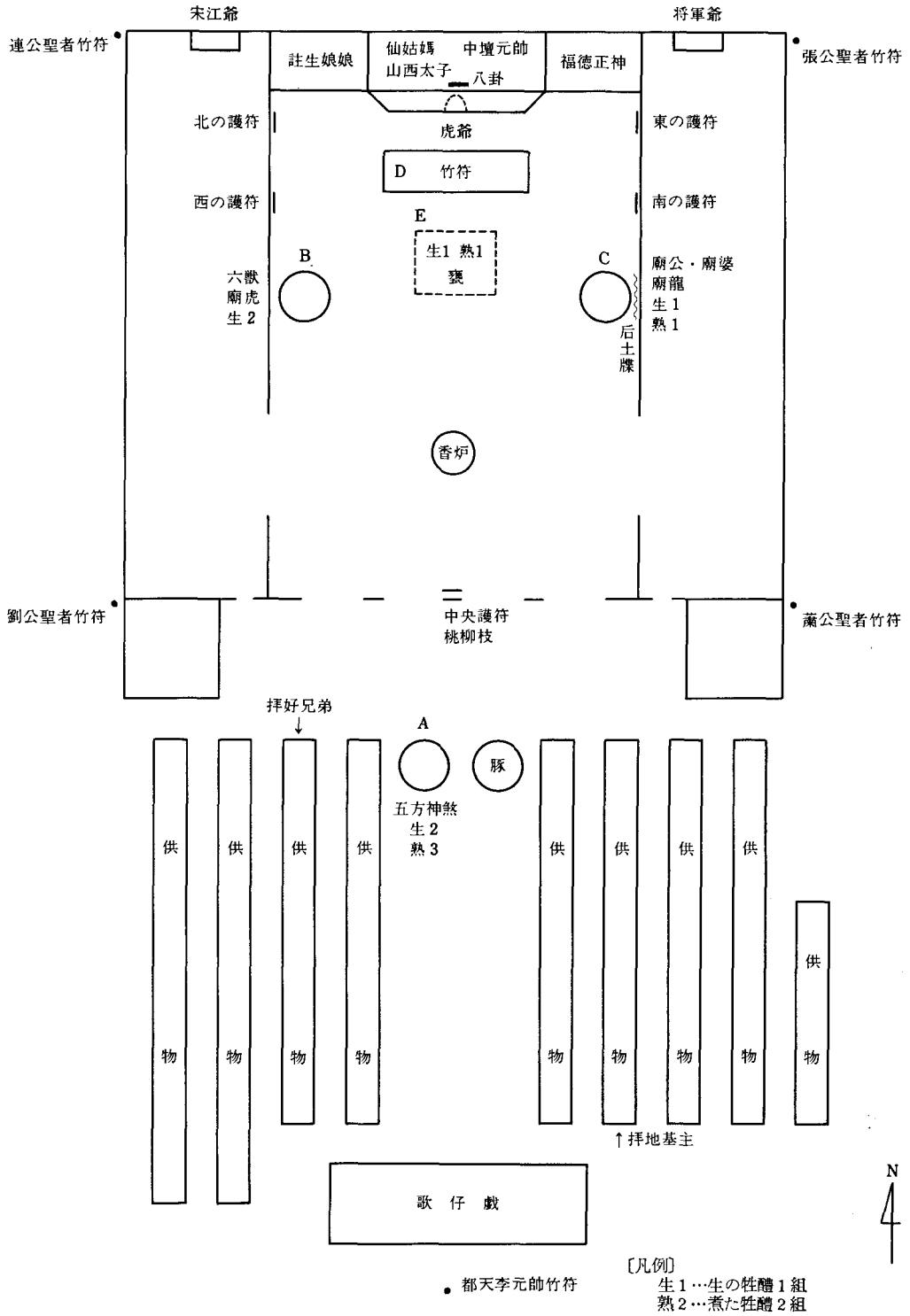


図1 姑媽宮謝土儀礼略図

続いて、△法師▽、△轎仔▽、△宋江陣▽、神像が廟内に入り、神像が安置される。

開金炉―△童乩▽が廟の神に捧げる△金紙▽を焼くための△金炉▽を開く。△金炉▽の口を覆った赤い紙を刀で裂く。

安座―△童乩▽と△轎仔▽から神が去った後、△法師▽が神々を安置した時に行う△安座▽の儀礼を行う。

以上で△開廟▽の儀礼は終了する。

## ② 謝土儀礼

一日の正午には、廟再建のために寄付をした者を招いて、廟の前で宴会が行われる。これは寄付に対する感謝と廟の披露を兼ねるものである。この日は、五〇卓の膳が用意され、五〇〇人が参加した。

△謝土▽儀礼は、高度の宗教的知識を必要とする儀礼であり、特に△大謝土▽の儀礼を行うことのできる△法師▽は限られる。日頃、姑媽宮の儀礼を行い、且つ△開廟▽儀礼を行った△法師▽には△謝土▽はできず、姑媽宮の△謝土▽儀礼は台南市在住の△法師▽に依頼した。△法師▽は助手一人と共に儀礼を行う。

まず、儀礼に用いる品々について簡単に説明しよう。

村人は△謝土▽のための供物を各家ごとに用意する。廟の前に供物を置くための多数の卓が並べられ、各家に一卓ずつ割り当てられる。人々は牲醴、米、果物、酒、菓子などを大量に供える。村人の供物は図1のように九列にわたって並べられるが、豚とAの祭壇の供物は村の費用でまかなわれる。

Aの祭壇には五体の人形が置かれるが、これは△外煞▽（外部にいる邪悪な超自然的存在）としての△五方神煞▽である。<sup>28)</sup>△五方神煞▽とは

五方にいる邪悪な超自然的存在であり、それぞれに人名がつけられている。東方―陳貴先、南方―蔡子良、西方―張主貴、北方―林慶宗、中央―姚百祥である。神名がつけられず、人名であることは「鬼」としての存在を物語るものである。また、祭壇の供物は煮た△三牲▽（豚肉、一羽の鶏、一匹の魚）と生の△三牲▽（生豚肉、生卵、生の豆腐）、茶、菓子、果物である。神や死者に対しては普通、生肉が供えられることはない。ここにも△五方神煞▽の特殊な性格がみてとれる。

△法師▽は廟内に以下のような祭壇を用意する。

B―祭壇には、紙製の六獣と虎が置かれている。六獣とは、人を守るものとされる。虎は、△廟虎▽であり、邪悪な存在とされている。祭祀される対象が獣であるので、供物の△三牲▽は生のものである。

C―壁にはられた紙は△后土牒▽と呼ばれる（写真⑱）中央の女神は九天玄女であるが、この神は神力が大変強いとされ、その力によって神煞を収める―△収煞▽を行う。金銀の丸は、一斗ずつの金と銀を表しており、これを△五方神煞▽に捧げて、去ってもらうとの意味である。祭壇は△神案▽といわれ、△収煞▽の儀礼の祭壇を意味している。祭壇の灯は△子孫灯▽であり、村人が子孫繁盛するようにとの願いが込められている。下方の五人は△内煞▽（内部にいる邪悪な超自然的存在）としての△五方神煞▽である。祭壇におかれた竹は廟の正面の八卦を守るためのもの―△桃柳枝▽であり、後の儀礼過程で廟の中央の入り口の上に掛

けられる。紙製の男女の人形は△廟公▽と△廟婆▽であり、廟を守護するものである。また、紙製の△廟龍▽も廟を守るものとされる。祭壇の供物は煮た△三牲▽と生の△三牲▽が供えられている。

D—米を入れたバケツに三本の竹符が立てられているが、普庵祖佛、九天玄女、楊府救貧仙師の名がそれぞれに書かれている。これらは、△五方神煞▽を抑える役割をもった神である。△五方神煞▽は普庵祖佛の外甥である。九天玄女はその神力の強さによって△五方神煞▽を取めることができ、また楊府救貧仙師も△五方神煞▽を抑える役割を持っている。以下、儀礼を順を追って説明する。

まず、廟内で△法師▽が儀礼を開始するための祈禱を行い、続いて廟外に出て儀礼が始まる。

庄外煞—廟の外のAの祭壇の前で、△法師▽は廟を背にして外に向かって祈禱を行う。これは△外煞▽である△五方神煞▽を祭祀し、供物を捧げ、この地から退散することを願うのである。

拝好兄弟—祖先として祭祀されていない死霊—△好兄弟▽を祭る。廟前の供物の内、廟からみて右半分は△好兄弟▽の供物とされる。また、△好兄弟▽は廟の外に在るものである。そのため、△法師▽は右側の供物の前に立ち、外を向いて祈禱を行う。これによって人に災いをもたらす△好兄弟▽を追い払うのである。

拝地基主—△法師▽は廟の左側の供物の外側へ行き、廟に向かって祭祀する。左側の供物は△地基主▽のものであり、本来は廟内にあるべきであるが、入りきれないために外に置かれたとする。左が優位な位置にな

るので、△地基主▽は△好兄弟▽よりも上位であることがわかる。△法師▽は供物を前にして廟内に在るとされる△地基主▽を祭るのである。浄水—村人が廟前に捧げた供物を清める。△法師▽が△神水▽<sup>(29)</sup>を草につけ、供物に振りかけて歩く。

疏文—△法師▽が祭祀のための文—疏文を読み上げる。

七献—△法師▽が花、菓子、貨幣を撒く。これは廟外に在る超自然的存在に対して供物を捧げるといふことが本来の意味である。しかし、実際には厄払いの意味があり、村人は争って撒かれたもの取ろうとする。

擲筭—これまでの祭祀が充分であったか否かを、祭祀対象に聴く。

△筭▽<sup>(30)</sup>が良いしるしを示すことによって、祭祀は△外煞▽、△好兄弟▽、△地基主▽の意になつていたことが保証される。

庄煞—△法師▽がAの祭壇の前であひるに刀を当て、「鴨殺<sup>ヤマト</sup>」という。この韻は「庄煞<sup>ヤマト</sup>」—邪悪なものを押さえ込みに通じる。実際にはあひるを殺すことはなく、あひるの足に巻いていた紙、ごぎ、箒をAの祭壇の外側に投げる。これによって、この祭場に来ていた邪悪なものは追い払われたのである。

以上で、廟の外における儀礼は終了する。各家庭と村から供物として出された紙銭は全て焼かれる。また祭壇Aの△五方神煞▽も焼かれる。

村人は供物を片付け帰宅する。各家庭では、一八時三〇分から村外の友人、親戚を招いて宴会が行われる。これ以後廟内で行われる儀礼には、村人は参加しない。<sup>(31)</sup>

廟内で行われる儀礼の目的は、△内煞▽としての△五方神煞▽を払う

ことにある。まず、儀礼開始の祈禱が行われて後、以下の順で儀礼が行われた。

**點鶏血**—法師▽が白い鶏のとさかを切って血を出し、血を流している鶏の頭を筆に見立てて、宙に呪文を書く。呪文の対象は、Cの祭壇の竹符、八卦、Bの祭壇の桃柳枝、中門である。鶏の血には霊力があると信じられており、その霊力によって廟内を清めようとするものである。

**翻神土**—廟内にいる邪悪な超自然的存在を追い払うため、それが潜む土を起こして吐き出すことを象徴する儀礼である。Eにごぎを敷き、その上で箒をもった法師▽が掃く所作をしながら踊る。その後ごぎをかぶって鶏のまねをして跳びまわる。

**収内煞**—廟内の△五方神煞▽（△内煞▽）を収める儀礼である。△硬仔米▽ともいう。Eの場所に供物を用意する。牲醴は煮たものと生のものが用意されている。写真②のような五つの碗が用意される。この碗は東西南北と中央の五方を表し、碗の中の米は△五方神煞▽を意味している。甕は井戸を意味しており、甕の口を覆った紙には「普庵祖佛によって五方神煞を収めて古井戸の中に落とす」と書かれている。この紙の中央に△法師▽が五つの碗から取った米粒を載せる。米粒を東西南北中央の順番で、九・八・六・五・三粒ずつ取り、さらにそれぞれの碗から一粒ずつとって全部で三六粒とする。これは三六地煞、つまり地にいる三六の邪悪な超自然的存在を意味している。次に△法師▽は線香で紙の端に五方を意味する五つの穴を開ける。△法師▽がこの甕の上で火のついた紙を振ると、米粒は自ら動いて穴の中に落ちていき、全ての米が穴の

中に落ちて、△内煞▽は甕の中に収められたことになる。

**埋甕**—米が納められた甕を村外に埋める。甕は逆さまにして埋められ、その上にDの三本の竹符が打ち込まれる。ここでBにあった紙製の虎と紙銭が焼かれる。虎を送る△送廟虎▽は邪悪なものを追い払う行為である。

これが終わると再び廟内に戻る。

**廟龍の開光点眼**—Cの祭壇にあった龍に霊力を込める開光点眼の儀礼を△法師▽が行う。開光鏡で光を龍にあって、開光筆に鶏の血を含ませて龍に点じる所作をする。霊をこめるための所作である。龍自体は焼くが、開光鏡と開光筆は永久的に廟に置かれ、龍がこの廟を守ることになる。

**貼剪刀鏡尺符**—剪刀鏡尺符とは建物に邪悪な超自然的存在が侵入することを防ぐためのものであり、家屋内の四方と中央の門の上に貼られる。符に描かれている鋏は、建物に邪悪なものが入って来たら切りとるという意味が込められている。鋏の刃は普通の家屋では全て上を向いているが、廟では中央の正門の符のみは下を向いており、「避邪」の威力は強力である。鏡も邪悪な超自然的存在の侵入を防ぐものである。定規はこの護符の長さをはかるものである。護符は二色の紙を地としているが、一二寸四方の紙の中央部に八寸四方の紙が貼られており、この位置関係は四時八節を意味している。四時とは四季であり、八節は立春、春分、立夏、夏至、立秋、秋分、立冬、冬至であり、「四時無災、八節有慶」の意である。中央の八寸の紙の色は方角を表し、一二寸の紙の色は五行説に基づいて中央の紙と「相生」<sup>32</sup>の関係にあるものが以下のように選ば

れる。

護符の方角 八寸紙の色 一二寸の紙の色

東	緑(木)	赤(火)
南	赤(火)	緑(木)
西	白(金)	黄(土)
北	黒(水)	白(金)
中央	黄(土)	赤(火)

掛桃柳枝―廟の正門の上に八卦を守る竹の枝を掛ける。これは中央の祭壇に掛けられる八卦の正面にあつて八卦を守るものである。

掛八卦―祭壇の上に、布に書いた八卦を掛ける。八卦は、邪悪なものを防ぐ役割を持ち、祭壇を守り、廟を守ることになる。

買断土地―紙銭を焼き、その灰を神々の祭壇の下にある△虎爺▽<sup>33</sup>の祭祀場所に置き、その奥に△地契磚▽を安置する。△地契磚▽は、廟の土地の陰界の持ち主△地基主▽から陽の世界の人間が廟の土地を買い取る(買断)の契約書である。(後述)これによって、廟の土地は人間のものとなり人間が使用しても災いがかかることはない。

打竹符―廟の外の四隅と中央正面に竹の護符を打つ。竹符にはそれぞれ、東―張公聖者、南―蕭公聖者、西―劉公聖者、北―連公聖者、中央―都天李元帥の名が記されている。この聖者は兵を率いた將軍であり、邪悪なものの侵入を防ぐものである。これによって、廟は内部からのみならず、外部からも守られるのである。

この儀礼をもって、△謝土▽の儀礼は全て終了し、△謝土▽を行った

△法師▽は廟を離れる。

③ 煮油と賞兵

△謝土▽の儀礼が終わった後、引き続き村を浄化する儀礼が執り行われ、翌日は神の兵を勞う△賞兵▽の儀礼が行われた。

煮油―火による浄化儀礼である。鍋に入れた油に筒を立てて火種を置き、酒を吹きかけることによって炎をあげて清めを行う。この儀礼は△開廟▽を行った△法師▽によってなされた。まず、廟の祭壇、柱などで炎を上げて廟内を清める。酒を吹きかけるのは△法師▽であるが、これに四媽の△童乩▽、二台の△轎仔▽が従う。さらに炎の上を神像を通して清める。その後一行は廟の外に出て、廟の周りを清め、村の周囲を守護する五營、天營、<sup>34</sup>各家庭を清めて歩く。各家では、△庁▽の机に一二碗の赤い団子の汁物を用意する。これは「円満」を表している。油の鍋を△庁▽に入れ、酒を吹きかけて炎をあげ、その炎の上を各家庭で祭っている神の香炉を渡す。これによって家が清められたのである。各家には廟の護符が配られる。一行が村中の家を清めて廟に戻ってくると、廟の前で炎が上げられ、集まった村人が炎を跨いだり、火の上を衣類を通して身の清めを行う。こうして煮油による廟と村の浄化が終わると火は消され、△童乩▽、△轎仔▽の神憑りが解ける。

賞兵―開廟に際して村の守護を行った神の兵を勞うために、△謝土▽の翌日に△賞兵▽が行われた。△賞兵▽の儀礼は、一か月に一度、廟の前の広場で行われており、△法師▽が△五營▽を象徴する五色の旗△五營旗▽をもって祈禱を行う。この時の△賞兵▽は、大きな儀礼が終わった



たので、村を守った兵を勞つて行われたものである。各家庭では△三牲▽、米、果物などの供物を用意して、広場に並べた。

以上をもって、△開廟▽に際しての△謝土▽の一連の儀礼は終了したのである。

(二) △謝土▽と地の世界

△謝土▽儀礼は、人が土地を人の住む場にするための手続きである。

ここでは邪悪な神煞を追い払い、人が土地を冥界から買い取りなくてはならない。また、人と地とは△鬼▽的存在を媒介として結びついているのである。これに関して以下、△地契磚▽と△地基主▽の分析を行うこととする。

① 地契磚

△地契磚▽とは、△地基主▽と人間の間で交わされる土地に関する契約書である。黒い二枚の瓦に契約文が朱書きされており、赤い布に包んで祭壇の下の△虎爺▽の祭祀場所に安置される。契約文の内容は法師の宗派によって若干異なるが、大意は同様である。姑媽宮の地契磚は法師のもつ『謝土安宅經』の經文に従って書かれた。經文は以下のようである。(原文には区切りはない。)

日立尺根磚契人盤古武夷王有地基一所 坐落台湾省△△市△△里  
東至甲乙木 西至庚辛金 南至丙丁火 北至壬癸水 四至明白為  
界 今托中引就陽間弟子△△承買 三面言議着下時價佛銀壹百貳拾  
兩 隨即請△△神明仝與張堅固李定度仝踏出地基一所 交付銀主人

前去掌管居住 起蓋大厝一造坐△向△分金△△ 左有青龍護蔭 右  
有白虎捍穢 前有朱雀除災 後有玄武降福 鈎陳呈蛇蔭 人丁米龍  
進宅 子孫興旺 萬代富貴 五穀豐登 六畜昌盛 四時無災 八節  
有慶 基地有山神土地管顧 不許外方邪魔侵擾 惡煞侵界 當驅除  
趕出外方 若有不明 武夷王出頭抵當 不予銀主之事 恐口無憑  
今欲有憑五合地契磚一面 付執觀音土地案棹下為照 即日全中人與  
神明修過地契磚面 銀壹百貳拾兩 完足再照

天運民國△△年△月△日

知見神 李定度  
主壇神 張堅固  
代書人 毛筆成

この經文に落成した家屋や廟の状況を補足して地契磚は書かれる。そこで述べられている内容はおよそ以下のようである。

地契磚の契約者盤古武夷王には一ヶ所の敷地がある。それは台湾省台南縣佳榕林にあり、四方が境を為している。今、仲介人を介して陽間の弟子姑媽宮の信徒が時価佛銀一二〇兩で購入する。仙姑媽(姑媽宮の神)、張堅固、李定度が敷地を監査し、購入者が土地を受け取り、廟を建てる。向きは南、左には青龍があつて良き報いをもたらし、右には白虎があつて穢れを寄せ付けない。前方には朱雀があつて災いを除き、後方には玄武があつて福を招く。鈎陳呈蛇が福をもたらし、人は増えて龍を招き、子孫は榮え万代までも富貴となる。五穀豊穣にして、六畜は繁殖し、四季に災いなく、八節に慶

びあり。敷地には土地公がいて土地を管理し、外から邪悪なものが入るのを許さない。もし、不明のことがあれば武夷王が解決する。購入者には関わりはない。ここに証拠として地契磚を書き祭壇の下に置く。

知見神 李定度  
主壇神 張堅固  
代書人 毛筆成  
天運民国癸亥年拾月八日  
立地契磚尺根字人武夷王

この契約書は一区画の敷地の陰界の所有者―地基主と陽界の所有者―人間との間で取り交わされたものであり、武夷王がこの契約に立ち会い、土地がこれ以後は人のものとなったことを保証するのである。盤古武夷王とは、神話の天地開闢の折、土地を管理することをまかされた神であり、全ての地基主を統轄する存在である。張堅固、李定度も地基主の一種であり、土地の広さを測るなどの役割を持っている。「青龍」「白虎」「朱雀」「玄武」「鈎陳」「呈蛇」と守るべき場所は五行説に基づいて述べられている。「山神土地」とは、土地公の別称である。土地公と地基主との関係については明確な説明を得ていない。この契約書が陰陽兩世界にまたがるものであることは、文字が一行ずつ逆さまに書かれる事に表れている。陰陽にまたがる契約によって土地は生きた人の住む場となるのである。△地契磚▽、△翻神土▽、△種仔米▽は△大謝土▽にのみあるため、ふつうの家屋には△地契磚▽がない事が多いが、ある場合には△斤▽の祭壇の下に置かれる。たとえ△地契磚▽自体がなくなるとも、謝

土の儀礼を行った事は、△地基主▽に行うべき支払を済ませたと解釈される。そして一度△謝土▽を行えば、それ以降△地基主▽を特に祭る必要はないと考えられている。

## ② 地基主

△地基主▽は謝土儀礼においては、重要な祭祀対象となるが、謝土儀礼が終われば人々は△地基主▽に注意を払う事はなくなる。地基主の性格についても、祭祀方法についても、人々の認識は曖昧なものである。△地基主▽はカテゴリーであり、個性をもっては語られない。

謝土儀礼を行った△法師▽の説明によれば、それぞれの敷地に各々異なる△地基主▽がおり、これらを統轄するのが盤古武夷王である。△地基主▽は地上界にいとされる。△法師▽も△地基主▽がもと人であったことは認めている。しかし、△地基主▽は既に神となっているのであるから、人が△地基主▽に贈る紙銭は、死者に対する△銀紙▽ではなく、△金紙▽であるとの謝土儀礼を行った△法師▽は説明している。

しかし、△法師▽によっては、△地基主▽に対して△金紙▽と△銀紙▽を捧げるべきとする者もいる。また、一般の人々の△地基主▽の認識は、「死者」としての色合いが濃い。地基主はこの土地の元の持ち主であり、陰間にいるとする。紙銭も△金紙▽と△銀紙▽の両方を贈るべきであると多くの者が多い。

△謝土▽を行った者は△地基主▽に対してその土地に住むための支払を済ませたのであり、この契約は△地基主▽の総裁である武夷王が保証したのである。これ以後、その土地は人の土地となり、災いのないこと

が契約書にも記されている。しかし、△謝土▽を行わずにその場所に住むことは、△地基主▽の怒りを招き、不幸が起これると考えられている。このため、祖先以外の人が持ち主であった土地に建造物を建てるのであれば、陰界所有者に支払を行わなくてはならないのである。祖先伝来の土地であっても、祖先が居住する以前はどうであったかは不明である。祖先が謝土をしたか、それが充分であったかも不明である。土を動かした際には、毎回謝土を行い、改めて地基主と契約を結び、邪悪なものを追い払い、以後の安泰を願うのである。

しかし、△謝土▽は出費がかさむため行わない家もある。こうした場合には、大晦日や中元節に各家で△地基主▽を祭ることもある。しかし、佳裕林内でも家々によって祭祀の場と紙銭が一定しない。ある家では△庁▽で△地基主▽を祭って△金紙▽を上げる。また、ある家では屋外に供物を置いて屋内に向かって祭祀を行い△金紙▽と△銀紙▽を上げる。前者の△地基主▽は「神」としての性格を濃厚にもち、後者は△鬼▽と神の両義の性格を有しているといえよう。

また、謝土を行わない場合には、毎月一六日に△鬼▽を祭るべきともされている。なぜ、△地基主▽ではなく△鬼▽を祭るべきなのかについては、一般の人も宗教的職能者も説明ができない。しかし、地基主自身も元は△鬼▽であったのであり、地に関わる超自然的存在と△鬼▽との密接な関係をここにみるることができる。

また、△謝土▽も行わず、△地基主▽も祭祀しない家もある。彼らは「祖先がここに住んでいたから」あるいは「一度祭るとずっと祭らなく

表3 地基主

地名	祭祀場所	紙 銭	祭祀単位	性 格
台南・佳裕林	庁or屋外	銀紙or金紙	庁の祭祀単位	以前の地主の死霊
台北・MS.	台所	銀紙	世帯	世帯の土地公・鬼
宜蘭・龜山島	屋外			鬼の一種
苗栗・五湖村		銀紙		屋敷神・鬼的存在
彰化・旧社村	屋外	銀紙	世帯	前住者の霊

てはならないから」と言う。こうした家も少なくないが、近年は新築が行われれば△謝土▽をしている率が高く、△謝土▽を行わない例は経済的理由によることが多い。

△地基主▽を祭祀する単位についてみると、佳裕林においては△庁▽を共有する家族を単位としている。家屋の謝土が行われるのは、△庁▽を含む部分が建造された場合であり、これは再建であっても行われる。

しかし、単なる増築や家畜小屋などの新築には△謝土▽は行われない。△謝土▽を行わない場合になされる、年末の地基主の祭祀や毎月一六日の△鬼▽の祭祀も△庁▽ごとに行われる。佳裕林においては△地基主▽の祭祀単位は、△庁▽の祭祀単位であるといえる。

次に他地域の△地基主▽の祭祀との比較をしてみよう。他地域では△地基主▽については、本格的な研究は行われておらず、断片的記述にとどまっている。しかし、それでも△地基主▽への認識や祭祀方法の多様性を指摘するには充分である。(表3)

台北縣樹林鎮 Mountainsstreet においては、△地基主▽は台所の門口や台所内部で大晦日に祭祀される。△地基主▽は両義的な霊のカテゴリーであり、家屋内

で祭祀されるが、△厝▽においてはではない。紙銭は△銀紙▽であり、△金紙▽は用いない。その性格は世帯の△土地公▽として、あるいは△鬼▽として説明される。△地基主▽は家の地主であり、大晦日に捧げられる供物は借地料と考えられている。△地基主▽の祭祀は世帯毎に行われる。(FEUCHTWANG 一九七四 一一四)

宜蘭縣龜山島では、△地基主▽はその家に他の男系親族が住んでいたことのあるものが祭祀する。現在の住人の男系的祖先が建てた家には△地基主▽はいない。△地基主▽は△鬼▽の一種であり、その家で死んでその霊はまだ敷地内にとどまっているとされる。毎月一日と一五日に、屋外で祭祀されるが、こうしなければ子どもが病気になる、他の不幸が家族に起こると信じられている。△地基主▽はふうふうカテゴリーとしてとらえられているが、△地基主▽とされる霊が個人名を持って特定の個人として祭祀されることもある。(WANG 一九七四 一八八—一八九)

苗栗縣西湖郷五湖村では、△地基主▽は屋敷神とされ、△鬼▽に近い存在である。△地基主▽への供え物は死後間もない霊に供えるような煮炊きしたものであり、紙銭も△銀紙▽である。△地基主▽はその屋敷の以前の所有者で、祀つる子孫のない孤魂である。(末成 一九九〇 二〇九)

台湾中部彰化縣社頭郷旧社村においては、各屋敷は「内底」といわれ、そこに住む世帯は共同して祖先を祭祀するにもかかわらず、△地基主▽は各世帯を単位として祭祀される。△地基主▽は家屋敷

の超自然的な主であり、前任者の霊とされる。大晦日に各世帯の炊事場に近い裏庭で△銀紙▽を燃やして祀つられる。(末成 一九八三 二八三—二八四)

このように△地基主▽の性格には偏差がみられるが、死霊と神の両義的性格をもつものであることは指摘できる。敷地に残っている前任者の死霊は、陰界においてその敷地の所有権を持っている。これに対して住む人間が支払をすることは共通である。しかし、それが「借地料」となるか、「買断」(買い取り)であるかは解釈の分れるところである。

## 五 「鬼」的の神と領域の神

△地基主▽の特徴的性格としては、死霊と神の両義性、一定領域の管轄が指摘できる。こうした特徴をもつ超自然的存在は他にも多々あるが、これらと比較して△地基主▽はどのような特徴を持っているかを以下で述べることにする。

### (一) 「鬼」的の神

「鬼」は人に害を及ぼす恐るべき存在であるが、こうした性格を変化させて人々の信仰を集めるようになることもある。こうした「鬼」から「神」へ完全に昇化した存在としては、△王爺▽<sup>オンヤ</sup>をあげることができる。しかし死霊としての性格をより濃厚に残しているものも多い。△地基主▽と比較するために「鬼」的の神についてみてみよう。こうした超自然

的存在として、佳榕林一帯では次のようなものが挙げられる。

△萬善公<sup>フジシヤン</sup>△あるいは△有庇公<sup>フイシヤン</sup>△と呼ばれるものは、「鬼」の内にて特に威力のある者が祠を作って祭られるものである。「鬼」がこの世の誰かに災いをもたらし、その人は不幸の説明を求めて宗教的職能者を探ねる。そこで、「鬼」が自分のために祠の建設を求めて災いをもたらしていることが知らされる。祠が建てられ、石などに△萬善公△あるいは△有庇公△と刻まれ、これが祭祀の対象となる。また、その死霊の姓をとって「陳元帥」「陸元帥」と記されているものもあるが、これらも神として祭祀されることになる経過は同様のものである。こうして「鬼」は神となり、求財、病氣平癒が祈願される。また、この種の神は賭博に効き目があるとされ、近年流行した宝くじ的賭博（大家楽、六合彩）に際して、この神に祈願することが各所で行われている。この神は「正神」といわれる神々とは異なる。まず、神像はなく、石に文字が彫られたのみである。また、神に通常あげられる紙銭―△金紙△のみならず、死者に対する紙銭―△銀紙△も燃やされる。これらは死者としての性格が濃厚である。<sup>(36)</sup>

また、△小神△と呼ばれるものは、子孫のいない死霊が「神」になること（成神）を望んだものであり、多くは未婚で死亡した女性の霊である。こうした女性のいる家族、あるいは親戚に不幸が絶えない際に、宗教的職能者にその原因を探ねることによって浮かばれぬ死霊の成神の希望が伝えられる。神像が作られその死霊が神霊として込められる。成神した神は、生前の姓をとって「○小娘」「○夫人」などと呼ばれる。こ

の神はシャーマンである△童叢△が死者の口寄せをし、死者と生者の媒介者となる。

佳榕林一帯では以上の二種類の神はしばしば見られるものであるが、他地域には次のような異常死をした神が見られる。台北縣三峽鎮において報告されている△姑娘廟△（WOLF 一九七四 一四九―一五〇）は未婚女性の骨を納めたものであるが、彼女等の集合的靈魂は売春婦の信仰を集めている。また、械闘で死亡した者を祭るものとして△義民廟△がある。これは本来異常死とされる戦死をした者が、その集団の英雄として祭られ、異常死が昇化されているのである。

こうした異常死をした霊は、神に昇化しても神のヒエラルキーの中では劣位の神とされ、「正神」とはならず、死者としての性格を完全には払拭していない。また、売春婦や博徒の信仰を集めるなど、「周縁性」をもつ神であるといえよう。さらに、「鬼」から「神」への変身は、「鬼」の可変性を物語っている。特にこうした神が死の世界にかかわり、冥界とこの世の媒介者ともなっている。

△地基主△はこうした存在よりも「神」としての性格は薄い。不特定多数の崇拜をうけることもなく、陰界の土地の所有者として、死者の性格を濃厚にもっている。

## (二) 土地の神々

△地基主△が土地にかかわる死霊とされる背後には、「霊は死んだ場所に残る」とする考え方がある。土地は人の霊の住む場所である。そし

てその土地を管理する神は死の世界との関連を強く持っている。△地基主▽は建造物のある敷地の陰界の所有者であるが、他の土地の神といかなる関係の中に位置づけられるであろうか。漢民族の民間の認識では、神の世界においてもこの世の行政組織と擬似的な土地神の管轄範囲がある。以下は佳榕林一帯の一般の人々の認識にそって述べたい。

① 城隍爺△境主公▽

土地の神のうち、陽間の行政組織と対応が明確に認識されているものは、城隍爺である。城隍爺とは都市の守護神であり、陰陽の両世界の神である。唐代から盛んに信仰されていたが、明清代には城隍爺を国家において祭ることになった。州城隍、府城隍、都城隍、天下都城隍(全国)というように地方行政組織と対応するものとされる。<sup>37)</sup>城隍爺と行政組織は必ずしも全てが対応するものではないが、官制の神としての性格をもつものである。城隍爺の神像は官服をまとい威厳に満ちている。

台湾における城隍爺について鈴木清一郎は次のように述べている。

城隍爺は台湾において人々の最も畏れ敬う神である。地方官は現世の陽間を支配する「陽官」であり、城隍爺は専ら陰間を支配し、来世も支配する「陰官」とされる。城隍爺は現世から来世にいたる人事の全てを処理する。かつては陽官は判断に困ることがおこると、城隍廟に行つて寝て、夢で城隍爺の判断をうかがった。城隍爺は民衆の生活をも統轄している。城隍爺は陰陽司、速達司、將軍などを派遣して、陰間と陽間を巡回させている。そして悪事を行う者に陰罰を加え、病気にしたり、貧困に陥れたり、生命を奪うこともある。

城隍爺はもとは人であり、死後、城隍爺の登用試験を受けて神となったものである。それは、水死して三年間、「鬼」となっていた者も資格がある。これは自分が成仏するために替わりの人を水に引き入れなかった者として評価される。また、有徳の人、あるいは生前に学問教養があつて邪悪な行為のなかった者が資格を持つ。(鈴木一九三四 四〇三―四〇八)

台湾では清朝時代に縣城となった街や発展していた鎮の街には城隍廟が見られる。しかし、城隍爺が独自に廟を持たない場合も、街の中心的廟に陪神として祭られていることが多い。城隍爺についての人々の認識は、「役人みたいなもの」「縣長や郷長みたいでその場所の責任者」といったものである。

A郷では郷の中心地の街の△大廟▽に△城隍爺▽が祭られ、一般には△境生公▽と呼ばれている。この神は街の一区画の住民の守護神としての性格も持つと同時に、A郷一帯の人々を統轄する神として考えられている。佳榕林付近では日常的に熱心な信仰はみられない。しかし、城隍爺と陰間のかかわりは認識されており、人の死後の行く末を決める神であるとされ、人は死後には管轄している城隍爺の前に引き出され、死後のあり方が城隍爺によって決定されると考えている。

城隍爺は陰陽両面を統轄する存在であり、管轄する範囲をもっている。その性格は、死者、特に△鬼▽が神に昇化したものであり、土地の神が陰陽にかかわる一例としてあげられる。

② △土地公▽

△土地公▽は正式には「福德正神」といわれ、台湾の民間において最も親しまれている神である。土地の神として田畑、道路、墓をその統轄下に置くだけではなく、財神としての役割ももち、農業や商業の従事者から厚い信仰を集めている。その神の像は白い髭を生やし、平服で穏やかな顔をした老人である。それぞれの土地公は土地神として一定の範囲の地域を管轄しているが、その範囲は城隍爺よりも狭いとされ、土地公を城隍爺の配下とする見方もある。土地公の祭祀形態も地域によって異なる。南投縣草屯鎮では土地公が独自に廟を持ち、集落の神となっている例が報告されている。(林 一九八七)しかし、佳榕林一帯では、土地公が独自の廟を持つことも少なく、地縁組織の神となることは稀である。田畑の中などに建てられた土地公廟は私的なものとして扱われており、信仰者が求財や除厄のために祭祀している。前述の賭博に際しても△土地公▽に祈る者も多い。佳榕林をはじめとして台南一帯の村々では、土地公は村の廟に陪神として祭られていることが多い。

土地公は元は人であり、陰徳を積んだ者が死後、土地公となるのである。△鬼▽の昇化したものと考えることができる。

土地公は、陰陽にまたがる存在であり、また、「鬼」を統轄するときされている。このため、「鬼」の祭祀の際には、必ず△土地公▽に対して△金紙▽が上げられ、祭祀の際の唱えごと△土地公▽の統轄の下で、「鬼」に供物が上げられることが述べられる。たとえば、△好兄弟▽の祭祀では次のように唱え言をする。「契請山神土地做主、衆好兄弟、陽民○○○○(祭祀する者の名前)、住址△△△△、今日○月○日、敬

備××××(供物の内容)、紙料来奉敬、請你来受納。請庇祐陽民○○○○、家内平安大賺錢」。この意味は、「△土地公▽に主宰してもらい、△好兄弟▽に対して、陽界△△△△にいる○○○○が供物と紙銭を捧げます。どうぞいらしてお受取下さい。○○○○を庇護下さり、家内安全でお金が儲かりますように」である。△土地公▽が主宰するということは、△鬼▽の祭祀にだけみられるものであり、祖先祭祀には△土地公▽に対する供物はなく、土地公は祖先には関与しない。祖先祭祀の際の唱え言は「奉請老祖公老祖媽、祖公祖媽、阿公阿媽、父母、列位衆公婆、今日○月○日、備辦××××紙銀来奉敬。保庇家内大小、家内平安大賺錢」となり、△土地公▽は関わっていない。

祖先は位牌があつて家屋内で祭祀されるのに対して、「鬼」はその存在を示す像ではなく、屋外にいるべきものであり、屋外で祭祀される。鬼は屋外の霊として、△土地公▽と強い結びつきを持つことになるのである。

土地公は自分の管轄地域の「鬼」がいかなる霊であり、どのようなことをしているかを把握していると人々は考えている。そのため「鬼」が人に災いをもたらすようなことがあれば、人々は宗教的職能者に依頼して△土地公▽を呼び出し、どの「鬼」が災いをふりかけているのかを調べてもらい、災いを及ぼさないように△土地公▽に仲介を頼む。こうした「鬼」を宥める儀礼では、△金紙▽と△銀紙▽の二種の紙銭が焼かれる。△金紙▽は土地公に対する「仲介料」であり、△銀紙▽は崇つている「鬼」に対して贈られるものである。

このように、台湾において最も人気のある神は、陰陽の世界をつなぐ、特に「鬼」と人との関係をとるもつ存在と考えられている。土地の管理者と陰陽の媒介者の重複はここにも見いだせるのである。

③ △五營兵▽

佳榕林一帯の村々では、家屋のある範囲の東西南北・中央の五箇所に△五營▽と呼ばれる小さな祠がある。これは村に邪悪なものが入ってこないように守備をする神の兵營であり、その兵は村廟の神が派遣したものであり、それぞれ「將軍」によって統轄されると考えられている。祠の中には竹に符を書いた竹符が置かれ、派遣された兵力の内容を書いた營旗が建てられる。△五營▽以外に玉皇上帝の兵が派遣された△天營▽が廟の前に設けられているが、形態や祭祀される機会は△五營▽と同様である。營旗に書かれた内容は以下のようなものである。

名称	旗の色	將軍	兵の内容
東營	青	張公聖者	九夷軍九阡軍馬九萬人
南營	赤	蕭公聖者	八閩軍八阡軍馬八萬人
天營	黃	南天大聖	柒軍柒阡軍馬柒萬人
西營	白	劉公聖者	六戎軍六阡軍馬六萬人
北營	黒	連公聖者	五狄軍五阡軍馬五萬人
中營	黄	都天李元帥	三秦軍三阡軍馬三萬人

これらの兵は△陰間▽にいる「鬼」がなるものとされる。五營兵は神とは考えられておらず、「鬼」が人のために働く存在として現れたものである。

五營兵を祭祀する儀礼として、△賞兵▽がある。佳榕林では、現在では月に一回行われ、廟の前の広場に各家から供物を持ち寄って兵を労う儀礼が行われる。この際、供物は籠などに入れられているだけであり、供物台としてのテーブルは用意されず地面に置かれる。兵に対しては△銀紙▽と△甲馬帛▽が焼かれる。△甲馬帛▽は、甲冑、武器、馬が描かれた紙銭であり、△賞兵▽に専門的に使われる。

△五營兵▽の守護者としての性格は、△鬼月▽に際してあらわれる。△鬼月▽には「鬼」が村内に入ってきて、人々から祭祀をうけ供物を捧げられる。通常は軍營にある兵が邪悪なものが村に入ることを防いでいる。このため六月末には△収兵▽といわれる儀礼が行われ、五營旗を廟内に入れ、五方の兵が廟に引き上げられることになる。こうして「鬼」は人の生活世界に自由に入入りできるようになる。△鬼月▽が終わり八月になれば、再び△放兵▽をして五營兵が再び村を守るのである。<sup>(38)</sup>

以上のように、土地の神や土地を守護する超自然的存在は管轄する地域をもっている。城隍爺は縣、郷鎮を統轄し、その下部には△土地公▽があり、さらに村は△五營兵▽が守る。△地基主▽とはその内部の屋敷地や廟の土地の靈的存在である。また、こうした領域の神々は、その前身は△鬼▽であり、城隍爺や土地公にみられるように陰陽をつなぐ存在である。領域の神々は通常は地上界にいる神として認識されており、「地」は陰陽の接点として存在している。



## 六 結び——死霊と「地」

漢民族の靈魂觀を考える際に、死霊——「鬼」の性格が多くの意味を含んでおり、その可変的でマージナルな性格が「鬼」と他の超自然的存在との関係や、人と超自然的世界との関わり方の鍵となることは、これまでの研究においても指摘されてきた。本稿では、「鬼」の地と関わる部分に焦点を当てて分析を行ったが、その結果として、以下の点が指摘できる。

### (一) 「鬼」の可変的性格

「鬼」の可変的性格に関しては、既に先行の研究において指摘されているところであるが、地に関する超自然的存在も「鬼」の変型であるということが出来る。鬼は祖先にも、神にも変化するものである。

「鬼」と祖先との差異は、冥界への参入の正統性によるものである。冥界に入る時間と空間が異常な霊は「鬼」となる。つまり、人は祖先となるため子孫を得ている「時」と八戸▽という死ぬ「場」を得ることが必要であり、しかざるもの——「鬼」はそれを正すことが求められる。子孫のない者に死後養子や冥婚が必要であり、八戸▽以外の死者には霊の特別の供養が必要である。こうすることによって「鬼」は祖先となることが可能である。

「鬼」と神の差異は、神が玉皇上帝の任命の下で人々に利益をもたらすのに対して、「鬼」は神の体系の外にあって、人に危害を加える存在

とされてきた。祭祀対象が神であるのか「鬼」であるのかについて、人々は紙銭が八金紙▽であるのか八銀紙▽であるのかで見分ける。しかし、「鬼」は神にも転換しうる。神々にはかつて死霊であったことを物語る伝承や祭祀方法を残しているものもある。「地」に関わる神は特にこれが濃厚である。

### (二) 「鬼」の世界と人の世界の交信の秩序性

これまでの研究においては、「鬼」のアウトサイダーとしての性格が強調され、「鬼」を無体系なものとみなしてきた。対して、渡邊欣雄は、次のように述べている。

「鬼は元來變化を予定された存在にすぎなかったといえる。……コスモスの世界に編入されずカオスの世界の性質そのままを携えて世に漂うことになる。鬼はしたがって、相対的視野で捉えうるアウトサイダーであるというよりはむしろ、アナキカルな存在であり、秩序に飢えるもの（パウパー）として絶対的な存在ではないか」。(渡邊 一九八八 六七)

渡邊は、コスモスの世界の源郷であるカオスの世界にいる「鬼」を捉え、「変化」する「鬼」の性格をより明確化した。しかし、鬼日の祭祀、「鬼」と土地の神との関連をみれば「鬼」は決して混沌たるカオスの世界に漂漾しているのではない。「鬼」はカオスからコスモスの世界に入ると。カオスにいる「鬼」はコスモスの神によって統轄され、人はこのコスモスの世界において「鬼」と交信できるのである。(図2)

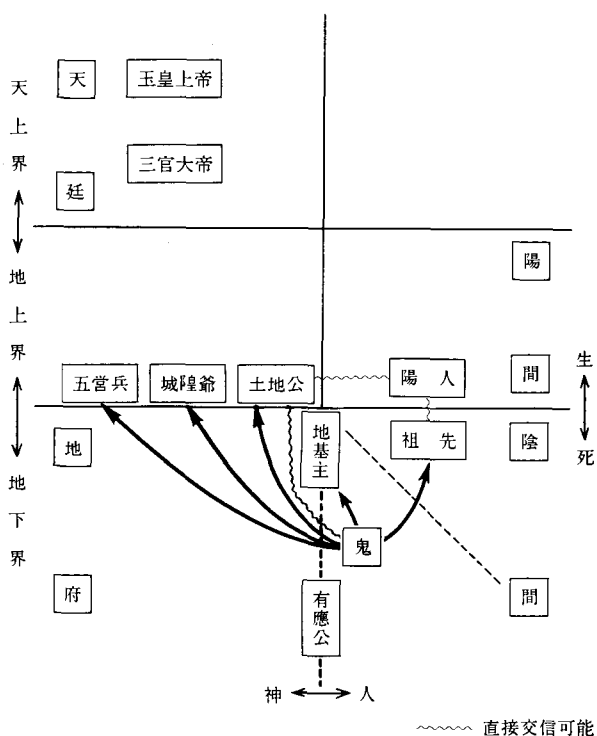


図2 地と死の世界

こうした人と「鬼」との交信には、必ず「鬼」を統轄する超自然的存在が登場する。△鬼月▽における△中元公▽や△大土爺▽の役割がこれに当たる。特に△鬼月▽は超自然的秩序が平時とは転換する。しかし、それは無秩序な世界が生まれるのではなく、「鬼」は中元公の支配する一定の秩序のなかで陽界を徘徊することになる。△土地公▽が果たす役割も同様であり、「鬼」の動静を把握しているのである。「鬼」は人にとって確かに恐れるべき存在であるが、それ故にこそ人には鬼と安心して交信できる体系が必要となり、それを行う超自然的存在も特定されている。

(三) 「鬼」と地の神の関連

人と「鬼」をつなぐ存在としてあらわれてくる△中元公▽(地官大帝)や△土地公▽は、「地」に関わる神である。また、陽間の人の来世を決める神としての城隍爺も領域の神である。こうした神々は土地の神であると同時に、陰陽両界にその役割をもつことになる。

また地に関わる神は「鬼」の変身でもある。城隍爺と△土地公▽は、以前は「鬼」であったものが神に昇格したものであることが明確である。また、五宮兵や△地基主▽も、「鬼」が変化したものである。

こうした「地」と「鬼」とのかかわりは、人々が「地府」と「陰間」を同一視していることにまさにあらわれている。しかし、「陰間」にかかわる神も、陰間にいる祖先と人をつなぐ役割は持たない。同じ死者であっても祖先に対しては人は直接的祭祀が可能である。しかし、人は地の神を媒介として、この世の秩序を破壊するもの―「鬼」との交渉がはじめて可能となるのである。

「鬼」が△土地公▽と関連していることは、宗教的職能者だけの認識ではない。一般の人々も、「鬼」に祭祀において△土地公▽に△金紙▽を捧げることによって、絶えず△土地公▽の存在を再確認していく。また、△亡魂▽を宥める儀礼においても、△土地公▽に贈る△金紙▽がある。こうした儀礼によって、「鬼」に関わる秩序について一般の人々も知識をもつことになる。

## 四 「鬼」と土地にみる人と冥界とのかわり

謝土儀礼は、「地」が冥界と人との接点として存在していることを物語っている。謝土儀礼は建物のある土地から邪悪なものを払い、浄化した空間を維持する△避邪▽儀礼である。人の住む土地は、もとは「鬼」のものである。△謝土▽において「陰」の持ち主から「陽」へ委譲されて、土地は人が住むことが可能になる。土地の超自然的存在の陰界への関与は、人が住む世界が他界とつながることを暗示している。

本稿は、△謝土▽儀礼と地基主の性格を中心に、死霊と地の世界との関連を述べてきた。人と死霊は「地」に関わる超自然的存在によって媒介され、人はその住む地によって冥界と切り放せない現世を知るのである。特に漢民族においては、死霊―「鬼」がいかに人々に認識され、「鬼」の世界がいかに描き出されるかは、神、祖先の認識をも含めて世界観に関する知識体系を知る上で重要なポイントとなる。また、こうした民間の知識体系―「民俗知識」<sup>(40)</sup>は、その内容よりも「知識」に対する人々の解釈こそが見きわめるべき問題点である。この「民俗知識」に関して、人々は社会における一つの共通の知識などは信じていない。筆者がインタビューをしている間、宗教的職能者からも一般の人々からも何度もいわれた。「違うことを言う人もいる。」「こんなふうにも言うんだよ。」「こんなことは聞いてもしかたないよ。ひとりひとり言うことが違うのだから、誰が正しいなんて分からない。」特に「鬼」にかかわる解釈は「鬼」の可変的で、地の神を媒介としている故に、人にとっては非

常に把握しにくい存在でもある。しかし、これまでの研究におけるように「鬼」を単に無体系、不可知的なものとするのではなく、人が現世と他界との説明するためのコードとして考えていく必要がある。「鬼」という多様な解釈の可能な存在を人々がいかに世界観のなかに位置づけていくか、あるいは「鬼」によっていかに他界を多彩に解釈していくか。漢民族は冥界をこの世と同様にリアルに描いている。そして、冥界と地を結び付けることによって、また「鬼」という浮遊性をもつ超自然的存在に一定の秩序を与えることによって、人が他界を生活の中に感じ、また解釈を与えているのである。

本稿でとりあげた死霊―「鬼」と地との関連に関しては、△謝土▽儀礼とその類似儀礼との比較、△地契碑▽に見られる土地の陰陽世界への所属の観念、世界観・死霊観に対する解釈の多様性など検討すべき点は数多い。今回の考察は不十分ではあるが、人が他界を認識するための死霊と地の世界との関連性についての一試論の提示としたい。

## 〔謝辞〕

本稿の資料収集に際しては、謝土儀礼を行った法師施錫輝氏には儀礼の説明をはじめとして多くの教示を賜った。深く感謝を申し上げたい。もし本稿中に不適切な箇所があれば、それは筆者の責任である。さらに、佳榕林をはじめとする多くの場所で、大勢の方のご助力を得た。お一人ずつお名前をあげることはあたわらないが、心からの謝意を表したい。

註

- (1) 八 √印のついたものはフォークタムである。特に重要なものにはルビによって台湾語の発音を示す。韻は台南地方のものである。
- (2) 土地公は土地を司る神であるが、その統轄範囲は広い。田畑や道路にかかわる際には八土地公√と呼ばれるが、山に関するれば八山神√となり、墓地の守護神となる場合には八后土√と呼ばれる。また、商売繁昌の神でもある。土地公の尊称は八福德正神√であり、廟において祭祀される場合には、この名称が用いられる。台湾において、一般に最も親しまれ、信仰を集めている神である。
- (3) たとえば、JORDAN 1972, FEUCHTWANG 1974, HARBELL 1974, WOLF 1974, WELLER 1987, 渡邊 一九八八・三尾 一九八九など。
- (4) 本稿の内容に関しては、既に以下のような発表を行っている。ご批判、コメントを賜った諸氏に御礼申し上げたい。国立歴史民俗博物館共同研究「家族・親族と先祖祭祀」研究会「祖先と鬼—台湾漢人社会における祖霊と死霊の世界—」(一九八八・五・二二)、第四二回日本人類学会における祖霊と死霊の世界—(一九八八・五・二二)、南山大学研究会—台湾漢人社会における鬼の意味—冥界・地界・人界の媒介者—(一九八九・一〇・二七)、第一七回比較家族史学会研究大会「漢民族における屋敷地と死霊の関係—台湾の事例から—」(一九九〇・六・九)。
- (5) 本稿の資料の多くは、佳榕林の調査(一九八二年二月—一九八四年九月、一九八五年五月—六月、一九八六年八月、一九八九年七月—八月)に基づくものであるが、一九八九年の調査ではA郷や台南市の宗教的職能者へのインタビュー調査や儀礼調査も行っている。A郷および佳榕林の概要については、植野 一九八七aを参照されたい。
- (6) JORDAN 1972, AHERN 1973, FEUCHTWANG 1974, WOLF 1974, WELLER 1987, 渡邊 一九八八。
- (7) 三界の区分については、「上界」「中界」「下界」という区分を述べる宗教的職能者もいるが、これらの語の解釈は多様であり、かつ一般的に人々の間では聞かれないので敢えて取り上げないこととする。
- (8) 道教の最高神。神々を神として承認し、その位階を決定し、神の統轄地を指令する存在と一般に考えられている。
- (9) 冥界において死者が住むために作られる紙の家屋。現世の人間の家屋を模して、専門の職人によって作られる。八紙厝√には家具一式、召使いがついており、現在では自動車付き、プールやヘリコプター付きのもの、あるいは西洋邸宅風のものもある。
- (10) 八銀紙√とは、死者が冥界で用いる金銭である。その種類には、八銀紙√八中銀√と言われるものがあるが、いずれも長方形の厚い黄土色の紙に銀紙を貼ったものである。これは死者—祖先と「鬼」に贈られるのみならず、「鬼」的性格を持つ超自然的存在に対しても贈られる。
- (11) 八斤√とは、家屋内にある神と位牌の祭祀場である。佳榕林一带においては、伝統的家屋はコの字型をしており、八斤√は家屋の中央部に設けられている。現代風な二階建て以上の家屋では八斤√は最上階に作られている。八斤√には神と位牌が祭られ、客間や食堂としても利用できるが、寝室として用いられることはない。同一家屋内に複数の世帯が住む場合は、八斤√は共有されるのが一般的である。
- (12) 台湾では、子孫がいない男性死者は、死後養子によって子孫を得、女性は冥婚によって子孫を得る。冥婚は、現在では生きている男性が死亡女性の位牌を「娶る」形をとる。冥婚の妻は夫と生きた妻との間の子供を自分の子とするのである。台湾の冥婚については植野 一九八七bを参照されたい。
- (13) 魂の行方について、再生するという仏教起源の考え方と陰間で生き続けるという考え方をジョーダンが紹介している。[JORDAN 1972 31-33]
- (14) 三魂七魄に関して、「魂」は死後七日間屍の側にあり、七魄は百日間屍の側にいるとも言われる。七魄はその内容が男女で異なるという。[大淵 一九八三 二一七—二一八]。
- (15) しばしば描かれている神は、観音、媽祖、福德正神、灶神などである。
- (16) 台湾の宗教的職能者としては、祭司としての道教の道士(八司公√)、呪術者としての八法師√、シャーマンとしての八童品√に大別される。
- (17) 八金紙√とは、神に対して贈られる紙銭であり、その形態は多様であるが金色がつけられている。対象とする神が天上界、地上界、地下界のいずれに在るか、あるいは特定の神であるかによって捧げるべき八金紙√の種類は異なる。たとえば、八大寿金√はいずれの神にもあげることができ、八天公金√は八玉皇上帝√に限られるというような決まりがある。金紙は

- 紙とは異なり、赤色が使われる。
- (18) 渡邊は「亡魂」を「例えば交通事故などで不慮の死をとげた、いわば災難死のような横死を経た人の霊である。…この霊の特徴は異常人格にあるより異常死に帰せられる」としている。「渡邊 一九八八 五七」。佳榕林の人々にはこうした明確な認識はないが、子孫があっても「亡魂」となり得るとされており、「亡魂」の冥界への異常な参入という点では共通である。「陰界からやってきた鬼ではあるが、人間にはなかなか存在する時間も空間も特定することができない。…危害の事前予知もその治療も、もはや一般人ではほとんどできず、占易の専門家に判断を委ねることになる」。「渡邊 一九八八 五七—五八」とし、餓鬼が危険でありながらも人々が対応できるのに対して、「外方」の浮遊性と危険性を強調している。
- (20) こうした霊の処理として、位牌や骨を仏教寺院に納める、冥婚によって「鬼」から「祖先」に転化する、あるいは「成神」によって「鬼」から人々に加護を与える「神」へと転化する方法がとられる。「植野 一九八七」
- (21) 三官大帝とは、天官大帝、地官大帝、水官大帝の三神であり、それぞれ一月一五日、七月一五日、一〇月一五日を聖誕日としている。各神が管轄する天界、地界、水界は宇宙を構成する三界であり、水界は地界の下にあるとされる。
- (22) 「普渡」については、A郷の街の廟の普渡を観察調査し、この儀礼を行った天師派（正一派）の道士から説明を得た。「大土爺」とはこの派が用いる名称であり、一般には「普渡公」と呼ばれている。この儀礼の詳細については別稿に譲る。
- (23) ジョーダン は、A郷の調査で観察した「謝土」を厄払いの儀礼として報告している。「JORDAN 1972 128—133」この場合は新築とは関係なく、悪運を払う「改運」のために行われたのである。
- (24) 道士が行う謝土は、廟の落成に際して醮が行われた場合に、「安龍謝土」の儀礼として行われる。「劉 一九八三 六〇九—六一〇」
- (25) 台湾においては、公的な祭祀を行う廟のシャーマンは男性である。女性のシャーマンは、未婚女性の霊が神となり個人的に祭られている「小神」など、私的な神にみられる。
- (26) 村で組織している演武団。三六人の青年が槍、刀、棒等の武器をもち、集団的な演武を行う。廟の大きな祭祀には参加する。
- (27) 廟門を開けるのは大変難しいこととされている。開け方を誤ると、開けた者が病気になるったり、死んだりするという。廟門を開くのは、「道士」や「童乩」や「開廟門」の心得のある「歌仔戲」（台湾語の歌劇）の団員であり、その開け方も足で蹴ったり、手によっても特別の所作によって初めて可能となる。姑媽宮の場合は、「童乩」が神の代理として廟門を開けたのである。
- (28) 神煞とは、邪悪な超自然的存在を意味している。煞神ともいうが、ここでは「法師」の用法に従い神煞と記す。
- (29) 神水とは、呪文が書かれた符を焼いた灰を入れた水である。
- (30) 符とは、超自然的存在の意向を聞くための道具である。一對の木片であるが、それぞれ一面は平坦であるが一面は盛り上がっている。これを投げて落ちた際に、もり上がった方が下になれば「陽」、上になって伏せた形になれば「陰」である。二つが「陽」であれば、神などが笑っている「笑符」、「陰」であれば怒りの表れである「陰符」である。「陰陽」になれば「聖符」といい、完全な満足を表す。
- (31) 「謝土」儀礼は本来大変危険なものであり、まかり間違えばおろくろく命をおとすこともある。一般の者は近寄らないようにする。「劉 一九八三 六〇九」。
- (32) 「相生」の関係とは五行の要素が生み出される関係に由来している。つまり「木」があって「火」が生まれ、「火」が燃えて「土」が出来る。「土」の中から「金」が生まれ、「金」が溶けて「水」が生まれる。「水」によって「木」は育つ。
- (33) 「虎爺」は虎の格好をしており、「土地公」の部下、あるいは乗り物と言われる。しかし、土地公廟以外でも祭られている。「虎爺」は金儲けの利益があるといい、博徒、演劇興業者の信仰を集めている。また、廟内の鎮護をよくする。病氣治療にも効果がある。「鈴木 一九三四 三三四—三三四」。
- (34) 五宮は村の四方向と中央に設けられた神の駐屯所であり、小さな祠が設けられている。兵は廟の神が派遣するものとされる。天宮は廟の前にあり、五宮と同様に村を守るものであるが、この兵は玉皇上帝が派遣すると思われる。
- (35) 鈴木清一郎は、「有庇公」を無縁の枯骨を神として祭ったものであると

- し、博徒の信仰を集めることを述べている〔鈴木 一九三四 二六七―二六八〕。
- (36) 有応公の境界的・多義的性格については、三尾裕子が述べている〔三尾 一九九〇〕。
- (37) 城隍爺の起源と廟の分布については、窪 一九八三 二七四―二七六および中村 一九八四 三一―五六参照。
- (38) 佳榕林では以前から「収兵」／「放兵」とも行われていない。これに関する説明は聞くことができなかった。
- (39) たゞそれは WOLF 1974 だ。
- (40) 「民俗知識」の研究の課題とその重要性については、渡邊欣雄の「民俗的知識の動態的研究」に啓発をうけたが、本稿では問題意識にとどまり、考察をすすめることはできなかった。今後の課題としたい。

参考文献

AHERN, Emily M. (1973) *The Cult of the Dead in a Chinese Village*. Stanford: Stanford University Press.

FEUCHTWANG, Stephan (1974) "Domestic and Communal Worship in Taiwan," in A. WOLF (ed.) *Religion and Ritual in Chinese Society*. Stanford: Stanford University Press:105-129.

HARRELL, C. Stevan (1974) "When a Ghost Becomes a God," in A. WOLF (ed.) *Religion and Ritual in Chinese Society*. Stanford: Stanford University Press: 193-206.

JORDAN, David K. (1972) *Gods, Ghosts, and Ancestors*. Berkeley: University of California.

窪 徳忠 (一九八三) 『道教の神々』 平河出版社。

林 美容 (一九八七) 『由祭祀圏來看草屯鎮的地方組織』 『中央研究院民族学研究所集刊』 六一 五一―一四頁。

劉 枝萬 (一九八三) 『中国道教の祭り』 上、桜楓社。

三尾 (木内) 裕子 (一九八九) 「漢人社会の超自然的存在についての一考察―台湾の事例を中心として」 『文化人類学研究報告』 五 (東京大学教養学部人文科学科文化人類学研究室)、一九一―一四八頁。

三尾 (木内) 裕子 (一九九〇) 『有応公』 信仰に見る漢人の世界観、阿部年

晴ほか編『民族文化の世界(上) 儀礼と伝承の民族誌』、二二三―二四〇頁 小学館。

中村哲夫 (一九八四) 『近代中国社会史研究序説』、法律文化社。

大淵忍爾 (一九八三) 『道教儀禮』、大淵忍爾編『中国人の宗教儀禮 佛教・道教・民間信仰』 一九九―一九四頁、福武書店。

末成道男 (一九八三) 『社会結合の特質』、橋本萬太郎編『漢民族と中国社会』 二六九―三三三頁、山川出版社。

末成道男 (一九九〇) 『伯公考―台湾客家系農村の事例より―』、阿部年晴ほか編『民族文化の世界(上) 儀礼と伝承の民族誌』 二〇二―二二三頁、小学館。

鈴木清一郎 (一九三四) 『台湾旧慣冠婚葬祭と年中行事』、台湾日日新報社。

植野弘子 (一九八七a) 「妻の父と母の兄弟―台湾漢人社会における姻戚関係の展開に関する事例分析―」 『民族学研究』 五一 一四、三七五―四〇九頁。

植野弘子 (一九八七b) 「台湾漢人社会の位牌婚とその変化―父系イデオロギ―と姻戚関係のシレンツ」 『民族学研究』 五二 一三、二二二―二三四頁。

植野弘子 (一九八九) 「台湾漢人社会の祖先祭祀―家族と宗族の祭祀をめぐる」 『渡邊欣雄編『環中国海の民俗と文化』 3 祖先祭祀』 九五―一一八頁、劉風社。

WANG, Sung-hsing (1974) "Taiwanese Architecture and Supernatural," in A. WOLF (ed.) *Religion and Ritual in Chinese Society*. Stanford: Stanford University Press: 183-192.

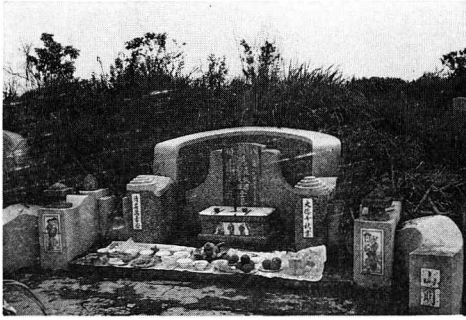
渡邊欣雄 (一九八六) 「民俗的知識の動態的研究―沖縄の象徴的世界再考―」 『国立民族学博物館研究報告』 別冊三、一―三六頁。

渡邊欣雄 (一九八八) 「台湾鬼魂考」 『社会人類学年報』 一四、四三―七二頁。

WELLER, Robert P. (1987) *Unities and Diversities in Chinese Religion*. Seattle: University of Washington Press.

WOLF, Arthur P. (1974) "Gods, Ghosts, and Ancestors," in A. WOLF (ed.) *Religion and Ritual in Chinese Society*. Stanford: Stanford University Press: 131-182.

(茨城大学教養部 国立歴史民俗博物館共同研究研究協力者)



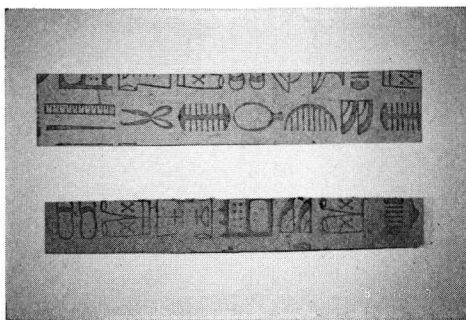
⑤ 墳墓—清明節 清明節の墓参は死後3年間、また家族に嫁取りや子供の出生のあった年には行われる。墓を掃除し、祭祀後供物を食べる。



⑥ 位牌祭祀—拝祖 端午節の祖先祭祀。先に「拝佛」として神を祭祀してのち、供物を加えて位牌祭祀をする。端午節には粽が必ずつくられる。



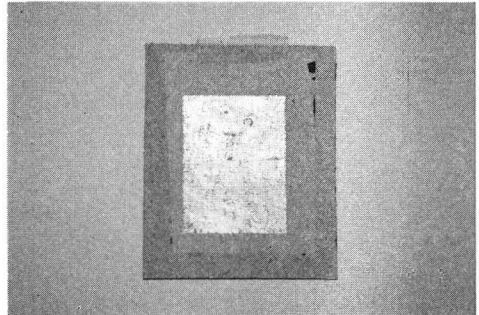
⑦ 好兄弟祭祀—拝門口 端午節前日の「鬼」の祭祀。写真⑥と同じ家である。供物を多くして「鬼」を満足させ、翌日の供物を取られないようにする。



⑧ 経衣 「鬼」が冥界で使う衣服や身の回りのものが印刷されている。上は女性用、下は男性用。祖先には用いない。



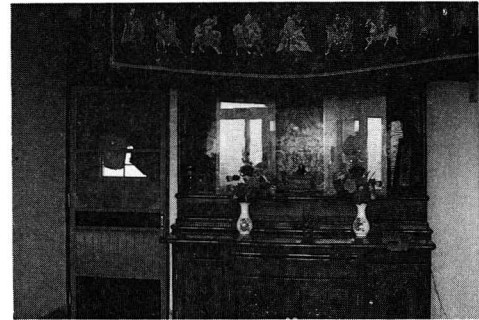
① 紙厝 納棺が終わってから、冥界の家である紙厝を焼く。紙厝とともに、冥界の金銭である銀紙と生前の衣服が焼かれる。



② 銀紙 冥界の金銭。祖先と「鬼」に捧げるもの。この銀紙は「銀」といわれるが、もっと小型の「中銀」は専ら「鬼」に捧げる。



③ 庁・厩架 古い形態の庁。香炉や位碑が置かれているのが、厩架である。正面には神像が飾られ、右側に祖先の位碑が置かれている。



④ 庁・佛厨 近年建設される二階建て以上の家屋では、最上階に庁が設けられる。こうした庁には佛厨が置かれる。



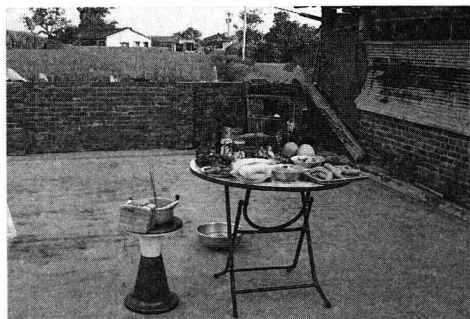
⑬ 過火 童乩が火渡りをする。



⑨ 金紙一天公金 玉皇上帝専用の金紙。金紙のなかでは最も大きく豪華。



⑭ 開廟 童乩が廟門の前で前まわりをし、足で蹴って廟門を開け立ち上がったところ。童乩を先頭に法師、轎仔などが廟に入る。



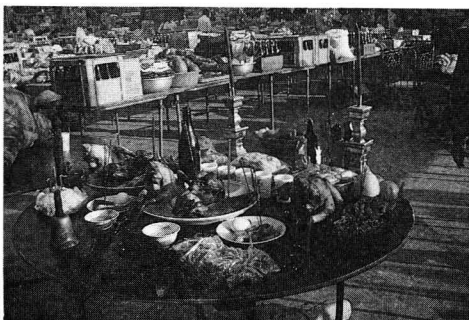
⑩ 鬼月の祭祀—開鬼門 7月1日に冥界から来る「鬼」を迎えるための拝門口である。洗面器は「鬼」が旅の汚れをおとすためのものである。



⑮ 落成の宴会 廟の落成祝いと披露を兼ねた宴会。募金をした人が招かれる。



⑪ 大土爺 観世音の化身とされ、頭に観世音を戴けている。供物を食べる「鬼」を監視するために置かれる。廟門は鬼月には閉じられる。



⑫ 謝土儀礼・Aの祭壇 五方神煞と牲醴、他の供物が置かれる。



⑫ 中元節・普渡の供物 各家ができる限り豪華な供物を用意する。

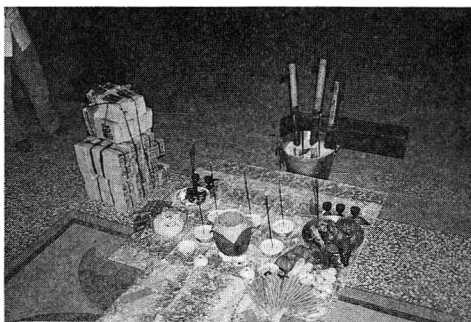




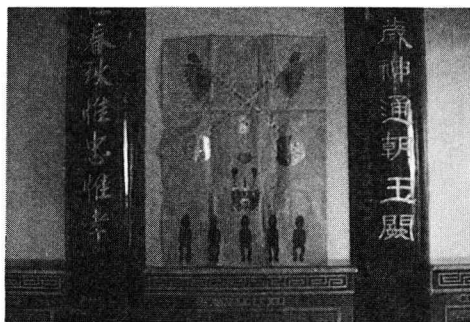
⑫ 謝土儀礼・翻神土 帚で土の中にある邪悪なものを掃き出す。



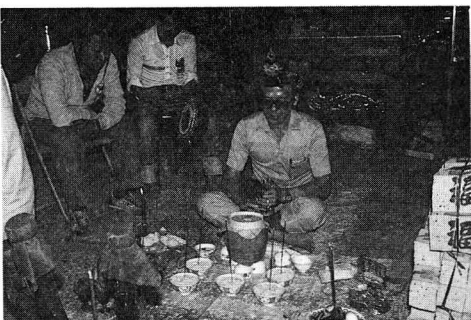
⑬ 謝土儀礼・Bの祭壇に置かれる六獣。



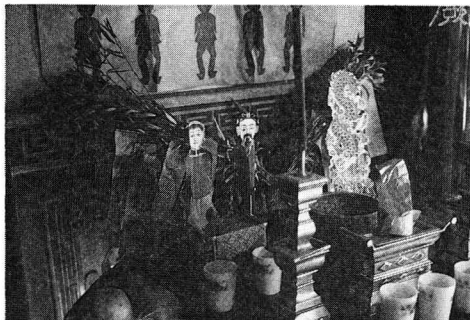
⑭ 謝土儀礼・E 収内煞のための儀礼用品。Dの祭壇に置かれていた竹符が正面に置かれる。



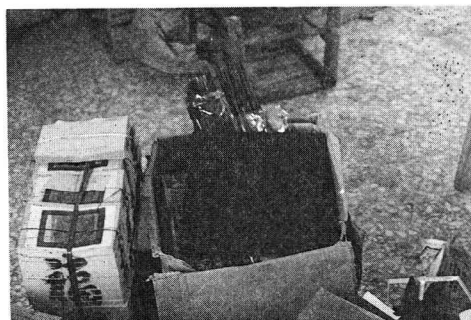
⑮ 謝土儀礼・后土牒 中央の女神は九天女。金銀の円は一斗の金銀を意味する。祭壇はEで行われる儀礼の祭壇を意味している。



⑯ 謝土儀礼・収内煞 甕の口に紙を貼り、線香で手前に5つの穴をあける。米を中央に置き、上で火のついた紙を振ると米が動いて穴に落ちる。



⑰ 謝土儀礼・Cの祭壇 廟公・廟婆・廟龍が置かれている。桃柳枝もここに置かれた後に掛けられる。



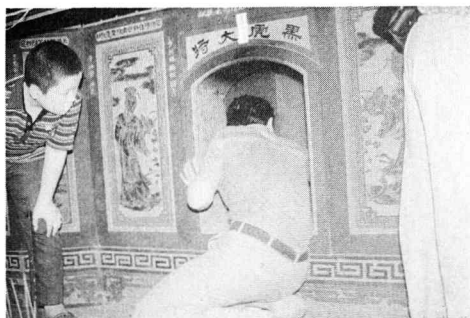
⑱ 謝土儀礼・地契碑 2枚で一組になっている。赤い布で包まれる。



⑳ 謝土儀礼・拜好兄弟 法師は廟の右側で外にむかって祈禱を行う。



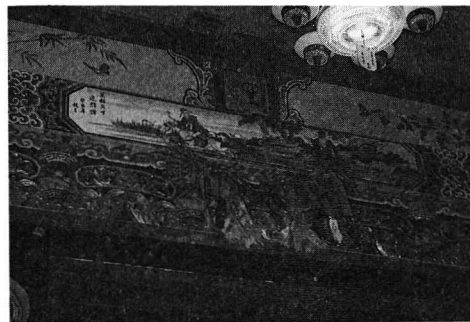
㉑ 城隍爺 官服を着て、家来を従えている。



㉒ 謝土儀礼・地契磚を納める 祭壇の下にある虎爺の祭祀場所の奥に地契磚を置く。



㉓ 土地公廟 福德正神—土地公は一般には白い髭の老人である。



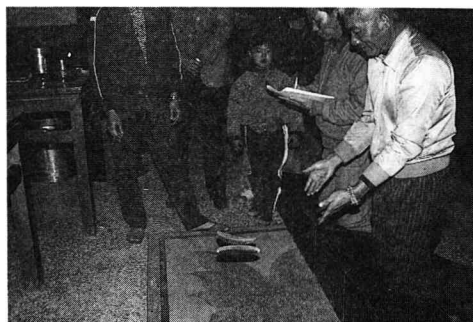
㉔ 謝土儀礼・剪刀鏡尺符 中央の門の上に貼られた。廟の符は鉞が下を向いている。



㉕ 五營 南營の營旗を替えているところ。



㉖ 煮油 家の庁を清める。炎の上で香炉などを渡す。



㉗ 筭 超自然的存在の意思を聞く道具。そのまま落ちれば「笑筭」になる。



㉘ 陸元帥 鬼が神化したものであるが、普通の神とは異なり神像はない。祭壇の前に置かれたのは砂であり、賭博の予知に使われる。

## Ghosts and the Gods of the Earth in Taiwan Chinese Society

UENO Hiroko

This paper is a hypothesis on the relationship between the ghosts and the supernaturals of the earth in Taiwan Chinese society.

In Chinese society the spirits of ancestors and ghosts are clearly distinguished. Ghost-“Gui”(“kui”) are considered to be spirits of those who died without descendants, or, those who died leaving a bitter grudge in this world. They are seen as being in an unhappy state in the otherworld. So such ghosts haunt this world spread disaster. However, the ghost has a changeable character, he can change into either an ancestor or a god. In preceding studies a ghost is regarded as an outsider of the spiritual world, those who has no systematic structure. But in this paper it is clear that the ghost is never wander in a chaotic world.

Gods who control ghosts appear in communications between men and ghosts. These gods are not only concerned with the otherworld and this world (*yin-yang* worlds) but also with the earth world. Some ghosts have risen to become such gods, but the gods still have ghost's characters.

In the completion ritual called “Xiedu”(“Siatho”), or thanks to the earth, the man who builds the construction has to clear off the evil from the site, and purchases the site from the site-owner spirit “Dijizhu” (“Tekico”), or foundation spirit. The Dijizhu is considered to be the former site-owner, whose spirit remained on the site after his death. In other words, Dijizhu is originally a ghost, and the ghost becomes the owner of the site in *yin* world. Dijizhu is an ambivalent category of spirit, he has two kinds characters of god and ghost.

A site becomes fit for human habitation only after it shifted from *yin* world to *yang* world. The earth has the function which links *yin* and *yang* worlds. Men and ghosts are intermediated by the supernaturals of the earth. Through the earth on which they live men can understand that this world cannot cut away from the other world. In Chinese society *yin* world is recognized having same systems of this world. By connecting *yin* world and the earth, and by giving a certain structural order to the ghosts who have a drifting character, man can feel and interpretate the supernatural world in his everyday life.